

東京国立文化財研究所要覧：平成3年度

出版年月日	1992-12-01
URL	http://doi.org/10.18953/00008587



東京国立文化財研究所要覧

1991

平成3年度

は じ め に

平成3年度は、東京国立文化財研究所の前身である美術研究所設立以来61周年を迎え、還暦を過ぎてあらたなる第1年目を歩み出す記念すべき年となった。

前年度発足したアジア文化財保存研究室の活動もいよいよ本格的となり、国際的な文化財保存修復に関する協力のためのセンター構想の充実化に向けて大きく前進した年でもある。その関連事業として、平成3年11月にはアジア16カ国及び国際文化財保存修復研究センター (ICCROM) から文化財専門家を招へいして「博物館資料の保存」というテーマで、第2回目のアジア文化財保存セミナーを開催、大きな成果を取めることが出来た。また1986年から進めてきた敦煌莫高窟壁画保存修復事業については、前年度に敦煌研究院と合意書を取り交わし、本年度より5か年にわたる本格的な日中共同研究が進められている。さらに海外所在の日本古美術品修復事業も本年から予算化され、ワシントン・フリア美術館所蔵の日本絵画の修復を実施し、またスミソニアン研究機構との保存科学研究交流も引き続き順調に進行中である。その他の国際交流事業としては、本年度で15年目となる国際研究集会を「能の伝承と再生」のテーマのもと、7名の外国人研究者を迎え、国立能楽堂を会場として充実した討議が行われたのも特記すべきことといえよう。この他文化財に関する個別的な外国研究者の来訪、研修、共同研究もますますさかんになり、国際的な文化財研究機関として、高い評価を得ることが出来たことは、喜びに堪えない。

この年度を終わるに当たって、佐藤芸能部長、馬淵保存科学部長をはじめ数名の職員を定年、転出などで見送ることになったが、当研究所の発展に尽力された諸先輩の御努力に対し心から敬意と謝意を表する次第である。

平成4年3月

東京国立文化財研究所長

西 川 杏 太 郎

目 次

I. 沿革	1
1. 設立	1
2. 年代別重要事項	1
3. 歴代所長	6
II. 機構・職員・予算	7
1. 機構	7
2. 職員	8
3. 名誉研究員	11
4. 予算	12
5. 特別研究一覧	13
6. 科学研究費補助金交付一覧	13
7. 受託研究一覧	14
III. 調査研究	15
中長期研究計画一覧	15
1. 美術部	17
(1) 概要	17
(2) 各論	18
2. 芸能部	23
(1) 概要	23
(2) 各論	24
3. 保存科学部	26

(1) 概 要	26
(2) 各 論	27
4. 修復技術部	34
(1) 概 要	34
(2) 各 論	35
5. 情報資料部	41
(1) 概 要	41
(2) 各 論	42
6. アジア文化財保存研究室	45
(1) 概 要	45
(2) 各 論	46
7. 国際調査研究	49
8. 主要研究業績	52

IV. 事 業	70
1. 出 版	70
(1) 美術研究	70
(2) 日本美術年鑑	71
(3) 芸能の科学	71
(4) 保存科学	72
2. 黒田清輝巡回展	72
3. 公開学術講座	73
4. 夏期学術講座	74
5. 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修	75
6. 国際研究集会	76
7. アジア文化財保存セミナー	79

8. 会 議	81
9. 国際・国内交流	83
(1) 職員の海外渡航	83
(2) 招へい研究員	85
(3) 海外研究者の来訪	87
V. 研究施設・設備	88
1. 蔵 書	88
2. 資 料	89
3. 主要機器設備	90
4. 黒田記念室	93
5. 閲 覧 室	93
VI. 関 係 法 規	94

I . 沿 革

1 . 設立の経緯

東京国立文化財研究所は、昭和27年4月1日発足したが、その前身であり母体となったものは、昭和5年に創設された政府機関の帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、大正13年7月、帝国美術院長子爵故黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために寄附出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行うべき事業の選定を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原謙二郎及び東京美術学校長正木直彦とはかつて諸方面の意見を徴し、また、わが国美術研究の必要に照らして次の事業を行うこととした。

- (1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
- (2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
- (4) 事業成立の上は一切これを政府に寄附すること。

2 . 年代別重要事項

昭和元年12月 前記の事業を遂行するため委員会が組織され、東京美術学校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業については東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列については東京美術学校教授久米桂一郎・岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二及び大給近清、建築造営については東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務については遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。

昭和2年2月 美術研究所準備事業を開始した。

同 年10月 東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192m²の建物1棟を起工した（本館）。

沿革

- 昭和3年9月 前記の建物が竣工したので、黒田記念館と名付け、美術研究所開設のため必要な備品・図書・写真等の研究資料を設備し、また、館内に黒田子爵記念室を設け、黒田清輝の作品を陳列した。
- 昭和4年5月 遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。
- 昭和5年6月28日 勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。
- 同 年10月17日 美術研究所開所式を挙行了た。
- 昭和7年1月 美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物『美術研究』を創刊した。
- 同 年4月18日 株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う5か年間毎年5千円、合計2万5千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。
- 昭和5年5月26日 帝国美術院はこの申出を受理した。
明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。
- 昭和9年10月18日 毎年10月18日を開所記念日と定めた。
- 昭和10年1月28日 鉄筋コンクリート造、2階建、延面積129m²の書庫が竣工した。
- 同 年4月 『日本美術年鑑』の編纂事務を開始した。
- 同 年6月1日 勅令第148号により美術研究所官制が公布された。
研究資料閲覧規程を制定し、閲覧事務を開始した。
- 昭和12年6月24日 勅令第281号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。
- 同 年11月29日 美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。
- 昭和13年2月12日 木造、平屋建、延面積97m²の写真室1棟が竣工した。
- 昭和19年8月10日 黒田清輝の作品、並びに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷

間家倉庫に疎開した。

昭和20年 5月28日 美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町1丁目本間家倉庫3棟に疎開した。

同 年 7～8月 酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市内外牧曾根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。

昭和21年 3月29日 酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。

同 年 4月4日 酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し、引揚げを完了した。

同 年 4月16日 東京都西多摩郡に疎開中の黒田清輝作品並びに写真原版の引揚げを完了した。

昭和22年 5月1日 美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。

国立博物館に保存修理課発足。同課内に保存技術研究室を置いた（保存科学部の前身）。昭和23年度より専任の職員を配置し、研究を開始した。研究室は国立博物館本館地下の修理室の一室（66m²）に設けた。

昭和25年 8月29日 文化財保護法の制定にともない、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。

同 年 8月29日 文化財保護委員会事務局設置にともない、保存科学研究室は国立博物館保存修理課から文化財保護委員会事務局保存部建造物課に所属換えとなった。

昭和26年 1月31日 美術研究所組織規程が定められ第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。

昭和27年 4月1日 文化財保護法の一部が改正、東京文化財研究所組織規程が定められ、美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の3部1室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。

また、文化財保護委員会事務局保存部建造物課保存科学研究室も廃止された。

同 年 7月1日 芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室2室を

沿 革

同大学から借用し、研究を開始した。

昭和28年4月26日 保存科学部研究室として、東京国立博物館構内の倉庫132m²を改造のうえ移転した。

昭和29年7月1日 東京文化財研究所組織規程の一部が改正され、東京国立文化財研究所となった。

昭和32年3月22日 東京国立博物館構内に木造、外部鉄網モルタル塗、平屋建、8 m²の保存科学部の薬品庫が竣工した。

同 年11月30日 従来の2階建書庫のうえにさらに1階を増築3階建とし、増築分延面積71m²が竣工した。

昭和34年4月30日 東京国立文化財研究所研究受託規程が定められ、この年度から受託研究が開始された。

昭和36年9月16日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、従来の庶務室は庶務課となった。

昭和37年3月31日 東京国立博物館構内に保存科学部庁舎（保存科学部実験室）として、鉄筋コンクリート造2階建延面積663m²の建物1棟が竣工した。

同 年7月1日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。

同 年7月20日 芸能部研究室は、保存科学部庁舎の竣工にともない、旧保存科学部庁舎に移転した。

昭和43年6月15日 文部省設置法の一部が改正され、本研究所は文化庁附属機関となった。

昭和44年8月23日 保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎（延1,950.41 m²）の起工式が行われた。

昭和45年3月25日 前記の別館が竣工したので、同年5月26日竣工式が行われた。

同 年3月25日 芸能部は、別館3階に移転した。

同 年5月8日 保存科学部は別館の地階～2階に実験用機械類の移転据付を完了した。

同 年6月29日 保存科学部庁舎の1階の模様替工事に着手し、同年10月15日工事が完了した。

同 年11月2日 所長および庶務課は、本館から保存科学部庁舎の1階に移転した(本館は、美術部庁舎となる)。これにより研究所の所在地表示は「12番53号」が「13番27号」に変更された。

昭和46年4月1日 保存科学部庁舎及び別館の敷地2,658m²を東京国立博物館から所管換された。

昭和48年4月12日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部が設けられ4部1課となり、修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が置かれ、保存科学部修理技術研究室は廃止された。

昭和52年4月18日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、情報資料部の新設により5部1課となり、情報資料部に文献資料研究室および写真資料研究室が置かれ、美術部資料室は廃止された。

昭和53年3月20日 本館構内の写場等(木造平屋建延面積144m²)を取りこわし、情報資料部研究棟として、鉄筋コンクリート造、地下1階、地上3階、延面積565.95m²の建物が竣工した。

昭和53年4月5日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部に第三修復技術研究室が置かれた。

昭和59年6月28日 文部省組織令が改正され、本研究所は文化庁施設等機関となった。

平成2年10月1日 文部省設置法施行規則の一部が改正されて新たにアジア文化財保存研究室が置かれ、5部1室1課となった。

3. 歴代所長 (昭和5年～平成3年)

主 事	正 木 直 彦	(昭和 5. 6.28～昭和 6.11.24)
主 事	矢 代 幸 雄	(昭和 6.11.25～昭和10. 5.31)
所長事務取扱	和 田 英 作	(昭和10. 6. 1～昭和11. 6.21)
所 長	矢 代 幸 雄	(昭和11. 6.22～昭和17. 6.28)
所長事務取扱	田 中 豊 藏	(昭和17. 6.29～昭和22. 8.15)
所 長	田 中 豊 藏	(昭和22. 8.16～昭和23. 5.10)
所 長 代 理	福 山 敏 男	(昭和23. 5.11～昭和24. 8.30)
所 長	松 本 栄 一	(昭和24. 8.31～昭和27. 3.31)
所長事務代理	矢 代 幸 雄	(昭和27. 4. 1～昭和28.10.31)
所 長	田 中 一 松	(昭和28.11. 1～昭和40. 3.31)
所 長	関 野 克	(昭和40. 4. 1～昭和53. 4. 1)
所 長	伊 藤 延 男	(昭和53. 4. 1～昭和62. 3.31)
所 長	濱 田 隆	(昭和62. 4. 1～平成 3. 3.31)
所 長	西 川 杏太郎	(平成 3. 4. 1～現 在)

2. 職 員

(平成4年3月30日現在)

所 属	職 名	氏 名	
所 長	所 長	西 川 杏太郎	(美術史)
庶 務	課 長	赤 羽 鉦 一	
	課 長 補 佐	長谷川 憲 康	
庶 務	係 長	大 堀 岳 満	
	係 員	相 澤 かず子	
	事 務 補 佐 員	中 村 節 子	
	"	内 藤 百合子	
	"	勝 木 なほ子	
	技 能 補 佐 員	堺 良 子	
会 計	調 査 員 (非)	松 原 美智子	
	係 長	篠 原 一 夫	
	係 員	鈴 木 秀 樹	
	事 務 補 佐 員	山 田 文 子	
美 術	労 務 補 佐 員	菊 地 廣 吉	
	部 長 事 務 取 扱	西 川 杏太郎	
	主 任 研 究 官	佐 藤 道 信	(日本近代絵画史)
	"	井 上 一 稔	(日本彫刻史)
第 一 研 究 室	室 長	三 宅 久 雄	(日本彫刻史)
	研 究 員	島 尾 新	(日本中世絵画史)
	調 査 員 (非)	佐 野 みどり	(日本絵画史)
第 二 研 究 室	室 長	三 輪 英 夫	(日本近代絵画史)
	研 究 員	山 梨 絵美子	(日本近代絵画史)
芸 能	部 長	佐 藤 道 子	(寺院芸能)
	主 任 研 究 官	鎌 倉 恵 子	(日本近世演劇)
演 劇 研 究 室	室 長	羽 田 昶	(日本中世演劇)
	調 査 員 (非)	高 橋 美 都	(日本音楽史)
音 楽 舞 踊 研 究 室	室 長	蒲 生 郷 昭	(日本音楽史)
	調 査 員 (非)	丸 茂 美恵子	(舞踊学)
民 俗 芸 能 研 究 室	室 長	中 村 茂 子	(民俗芸能)
	調 査 員 (非)	三 村 昌 義	(芸能史)

所 属	職 名	氏 名	
保 存 科 学 部	部 長	馬 淵 久 夫	(同位体化学)
	主 任 研 究 官	門 倉 武 夫	(分析化学)
	〃	石 川 陸 郎	(光学)
化 学 研 究 室	室 長	平 尾 良 光	(無機化学)
物 理 研 究 室	室 長	三 浦 定 俊	(計測工学)
	研 究 員	佐 野 千 絵	(光化学)
生 物 研 究 室	室 長	新 井 英 夫	(微生物学)
	調 査 員 (非)	山 野 勝 次	(応用昆虫学)
修 復 技 術 部	部 長	三 輪 嘉 六	(考古学)
	主 任 研 究 官	川 野 邊 涉	(高分子化学)
第一修復技術研究室	室 長	中 里 壽 克	(漆芸技法)
第二修復技術研究室	室 長	増 田 勝 彦	(装潢技術)
第三修復技術研究室	室 長	青 木 繁 夫	(考古学)
	技 術 補 佐 員	大 竹 和	
	〃	細 川 金 也	
情 報 資 料 部	部 長	鶴 田 武 良	(中国絵画史)
文 献 資 料 研 究 室	室 長	米 倉 迪 夫	(日本中世絵画史)
	研 究 員	井 手 誠 之 輔	(東洋絵画史)
写 真 資 料 研 究 室	室 長	鈴 木 廣 之	(日本近世絵画史)
	研 究 員	長 岡 龍 作	(日本彫刻史)
	専 門 職 員	市 川 和 正	(美術写真)
	〃	野 久 保 昌 良	(美術写真)
ア ジ ア 文 化 財 保 存 研 究 室	室 長	西 浦 忠 輝	(材質改良学)
	研 究 員	朽 津 信 明	(地質学)
保 存 科 学 部	客 員 研 究 員	山 崎 真 司	(微生物学)
修 復 技 術 部	〃	金 子 克 美	(表面化学)
情 報 資 料 部	〃	伊 興 田 光 宏	(情報工学)

機構・職員・予算

平成3年度における退職者

所 嶺	官職名	氏 名	在 所 期 間	備 考
庶 務 課	事務補佐員	志 村 浩 美	昭63.11.16～平3.6.29	退 職
	〃	村 上 幸 子	平 3. 8.30～平3.9.13	〃
	〃	白 井 久美子	昭63.11. 1～平3.10.5	〃
	〃	宮 崎 章 子	平元. 9. 1～平4.3.30	〃
芸 能 部	部 長	佐 藤 道 子	昭30. 5.16～平4.3.31	〃
	調査員(非)	三 村 昌 義	昭63. 4. 1～平4.3.31	〃
保存科学部	部 長	馬 淵 久 夫	昭50.10. 1～平4.3.31	〃
修復技術部	技術補佐員	細 川 金 也	平 4. 5. 1～平4.3.30	〃

3. 名誉研究員

氏 名	退職時官職名	在所期間	名誉研究員 発令年月日
白 畑 よ し		昭 5. 6.30~昭27. 8. 1	53.10.18
福 山 敏 男	美 術 部 長	昭23. 5.11~昭34. 4.15	"
高 田 修	"	昭27.12. 1~昭44. 3.31	"
登 石 健 三	保 存 科 学 部 長	昭27.10. 1~昭50. 4. 1	"
岡 畏三郎	美 術 部 長	昭20. 5.15~昭51. 4. 1	"
中 村 傳三郎	美 術 部 第 二 研 究 室 長	昭22.10. 1~昭53. 4. 1	"
関 野 克	所 長	昭40. 4. 1~昭53. 4. 1	"
秋 山 光 和	美 術 部 第 一 研 究 室 長	昭16.10. 1~昭42. 2. 1	54.10.18
久 野 健	情 報 資 料 部 長	昭20. 5.31~昭57. 4. 1	57.10.18
川 上 涇	美 術 部 長	昭21. 2.28~昭57. 4. 1	"
関 千 代	美 術 部 第 二 研 究 室 長	昭18.12.15~昭58. 4. 1	58.10.18
横 道 萬里雄	芸 能 部 長	昭28. 3.16~昭51. 4. 1	59.10.18
上 野 ア キ	情報資料部文献資料研究室長	昭17.11. 3~昭59. 4. 1	"
江 上 綏	情報資料部主任研究官	昭38. 5.18~昭59. 3.31	"
田 村 悦 子	美 術 部 主 任 研 究 官	昭22. 6.16~昭60. 3.31	60.10.18
猪 川 和 子	情報資料部文献資料研究室長	昭22. 6.27~昭60. 3.31	"
伊 藤 延 男	所 長	昭53. 4. 1~昭62. 3.31	62.10.18
柳 沢 孝	美 術 部 長	昭27. 4. 1~昭62. 3.31	"
宮 次 男	情 報 資 料 部 長	昭30. 9. 1~昭62. 3.31	"
三 隅 治 雄	芸 能 部 長	昭27.10. 1~昭63. 3.31	63.10.18
樋 口 清 治	修 復 技 術 部 長	昭37.11. 1~昭63. 3.31	"
田 實 榮 子	美 術 部 主 任 研 究 官	昭23. 3.31~平元. 3.31	1.10.18
見 城 敏 子	保存科学部物理研究室長	昭34. 4. 1~平元. 3.31	"
濱 田 隆	所 長	昭62. 4. 1~平 4. 3.31	3.10.18
関 口 正 之	美 術 部 長	昭42. 2. 1~平 3. 3.31	3.10.18

4. 平成3年度予算

() は補正後を表す

事	項	金 額
		千円
人件費		(333,815) 331,545
運営費		(174,183) 183,791
事業管理		(32,054) 34,590
一般研究		(40,783) 42,895
特別研究		(34,587) 36,445
受託研究		(2,371) 2,371
文化財保存修復の国際交流事業の促進等		(64,388) 67,490
施設費		(25,810) 26,929
文部省		
各所修繕		3,280
在外研究員旅費		4,316
	計	(541,404) 549,861

5. 平成3年度特別研究一覧

事 項	金 額
	千円
日本近代美術の発達に関する明治後半期の基礎資料集成	1,957
仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究	2,674
文化財の伝統的保存修復材料に関する研究	4,404
アジア文化財保存修復協力センター（仮称）設置のための調査	3,087
有形・無形文化財研究支援データベースシステムの構築に関する調査研究	3,003
鉄器材質の歴史的変遷に関する研究	4,320
研究用機器整備（電子スピン共鳴装置）	15,000
博物館等館内における環境制御に関する研究	2,000
計	36,445

6. 平成3年度科学研究費補助金交付一覧

種 別	課 題 名	研究代表者	交付額
			千円
総合研究(A)	美術史研究における基礎資料の共有化とデータベースの活用	米倉 迪夫	3,000
一般研究(A)	文化財の修理・修復の情報化に関する基礎的研究	三輪 嘉六	15,000
一般研究(B)	出土鉄器の鉛同位体法による原料産地の推定	平尾 良光	2,500
〃	石質遺跡の新しい保存技術の開発に関する研究	西浦 忠輝	800
一般研究(C)	近代史学としての日本美術史学の成立と展開	佐藤 道信	1,200
国際学術研究	東アジア地域の古文化財（青銅器および磁器・陶磁器）の保存科学的研究	馬淵 久夫	6,000
〃	中国砂漠地帯における文化財保存のための自然環境に関する共同研究	三輪 嘉六	2,900
計			31,400

7. 平成3年度受託研究一覧

研 究 課 題	受 入 額
	円
徳永川の上遺跡出土金属製品の保存修復研究	497,420
舟塚古墳出土金属製品の保存修復研究	700,315
隈・西小田地区遺跡出土銅戈の保存修復研究	599,522
風邪引き紙に関する研究	730,422
トルコ、カマン・カレホユック遺跡出土金属製品の調査研究	575,960
計	3,103,639

III. 調査研究

中長期研究計画一覧

部 名	課 題 名	研究代表者	期 間
美 術 部	*美術における地域性及び社会性の研究	三輪 英夫	平元. 4 ~平 6. 3
	*美術に関する基礎資料の研究—絵巻資料, 明治後半期美術資料及び関東所在水墨画資料を中心として—	三輪 英夫	"
	*来迎を中心とする浄土教美術の研究	三宅 久雄	平 3. 4 ~平 6. 3
芸 能 部	*仏教系芸能の芸能史的位置付けのための調査研究	佐藤 道子	昭63. 4 平 4. 3
	*寺院行事の研究	"	昭60. 4 ~平 4. 3
	*採り物の研究	中村 茂子	昭61. 4 ~平 5. 3
	*日本音楽各種目の独自性と相互影響の研究	蒲生 郷昭	平元. 4 ~平 6. 3
	*絵画資料による近世演劇の研究	鎌倉 恵子	平 3. 4 ~平 6. 3
	*能楽の芸能学的調査研究	羽田 昶	平 2. 4 ~平 7. 3
保存科学部	*フォクシングの保存科学的研究	新井 英夫	平元. 4 ~平 5. 3
	*有機質文化財の光による劣化の定量的評価法の確立	三浦 定俊	平元. 4 ~平 7. 3
	*特殊環境に置かれた文化財の保存条件の検討	石川 陸郎	平元. 4 ~平 9. 3
修復技術部	*文化財の伝統的修復材料の研究 (第1期)	三輪 嘉六	平元. 4 ~平 5. 3
	*屋外文化財の劣化過程の調査と修復法の開発	中里 壽克	平元. 4 ~平 6. 3
情報資料部	*日本・東洋美術史文献データベースの開発	米倉 迪夫	昭63. 4 ~平 6. 3
	*美術史における画像処理技術の応用に関する基礎的研究	鈴木 廣之	平元. 4 ~平 6. 3

調査研究

部 名	課 題 名	研究代表者	期 間
情報資料部	*美術情報処理システムの研究—データの共有化を中心として—	鶴田 武良	平元. 4 ～平11. 3
ア ジ ア 文化財保存 研 究 室	*屋外石造文化財の劣化と保存修復処 置に関する研究	西浦 忠輝	平 3. 4 ～平 8. 3
	*アジア諸国における文化財保存に関 する情報の収集	西浦 忠輝	〃

1. 美術部

(1) 概要

美術部は日本・東洋の古美術並びに日本の近代・現代美術とこれらに関連ある西洋美術についての基礎的調査研究を行い、かつ、その成果を公表することを目的としている。美術部は二室より構成され、第一研究室は古美術を担当し、第二研究室は近代・現代美術を担当している。

調査研究は各時代にわたり絵画・彫刻・工芸の各部門について、作品と文献資料との両面から実証的に進められており、ともに基礎となる研究資料の作成と整理とにつとめている他、現代美術の動向に関する調査と資料収集をも平行して行っている。また、作品に関し、早くから実施してきた科学的な鑑識法を積極的に活用しているのも当部の特色である。さらに情報資料部員とは研究や調査の面で緊密な協力が行われている。平成元年度より着手した「美術における地域性及び社会性の研究」は、第3年次をむかえ、各研究班により調査研究が進められている。第二研究室では、昭和63年度より特別研究「日本近代美術の発達に関する明治後半期の基礎資料集成」を4か年計画で開始し、その成果を「美術研究」353号に発表するとともに、新たに資料収集と研究調査を進めている。そのほか他機関との共同研究による広領域の研究にも参加している。なお、研究員それぞれの研究課題と内容は(2)の各論の項に示すとおりである。

研究調査の結果は、第一研究室全員が編集担当する機関誌『美術研究』（昭和7年創刊）やその他の学会誌に発表し、また、第二研究室を中心とする『日本美術年鑑』（昭和11年創刊）を発行しており、単行の研究報告も随時刊行している。さらにそのほか情報資料部との共同で、研究成果の一部を広く一般の理解に資するために毎年一回公開学術講座を開催している。なお、黒田清輝の遺産に基づいて創立された美術研究所、現美術部は黒田清輝の作品その他関係資料を保管し、その多くを陳列する黒田記念室は毎週一回木曜日の午後公開している。

第一研究室

明治以前の日本美術及び東アジア地域の美術に関する調査研究並びに資料収集と公表を主務とする。なお『美術研究』の編集を担当している。

第二研究室

明治以降の日本近代美術に関する調査研究と、これに関連する西洋美術及び日本近世の洋風美術の調査研究、並びに現代美術の動向に関する資料の収集と調査とを継続して行っている。また昭和63年度より4か年計画で特別研究「日本近代美術の発達に関する明治後半期の基礎資料集成」を開始し、第4年度の調査研究を行った。とくに現代美術に関する調査研究においては、その年度に収集した資料を整理し、その成果を『日本美術年鑑』として毎年公刊している。平成3年度は、平成2年の内容をもった平成3年版を刊行し、引続き平成4年版の編集に着手した。

また、昭和52年度以降実施してきた黒田清輝巡回展は当研究室が中心となって行っており、平成3年度は宮崎県総合博物館で開催した。

(2) 各 論

1. 美術における地域性及び社会性の研究（5年計画の第3年次）

各地域における美術の史的展開には、それぞれの地域のもつ空間的諸特性にもとづく差異が大きく反映されていることは従来指摘されながらも、具体的な問題に即した総合的な解明は試みられていない。本研究は、地域固有の社会的ないし文化的側面における特殊性を重視し、地域間における交流の様態と、その伝播・受容の結果として行われる各地域内での変容の固有な形態を明らかにすることを目的とする。

(1) 中世美術の諸問題

1) 外来の視覚情報の伝播経路とその発展の地域的差異

請来仏画作品の調査と基礎資料の収集を継続し、a) 普陀山境図、元時代（長野・定勝寺）、b) 林子明筆、釈迦三尊像、元時代（長野・定勝寺）、c) 周四郎筆、仏涅槃図、元時代（長野・定勝寺）、d) 林庭珪・周

季常筆、五百羅漢図、南宋時代（フリア美術館）について調査を行った。

また、日本における大陸仏画受容の様相を、13・14世紀の仏涅槃図を通して明らかにし、その成果の一部を美術部・情報資料部公開学術講座で発表した。

2) 芸術家の社会的地位

雪舟のイメージ形成についての研究を継続し、雪舟関係史料の検討を通じて得られた成果の一部を公表した。(美術研究351)

3) 15・16世紀における絵画マーケット

室町時代の絵画の価格及び画師の雇用形態等について研究をすすめる、相国寺松泉軒における小栗宗継の障子絵制作についての研究成果を公表した。(美術研究352) <島尾、(情) 鈴木、井手>

(2) 欧米と日本における日本美術観の相違

19世紀後半に形成された欧米および日本でのそれぞれの日本美術観について、a) 欧米の日本美術コレクション・日本美術観が、浮世絵・工芸品中心であるのは何故か、b) 日本の日本美術観が、絵画・彫刻を上位とするのは何故か、の両面から、この問題を検討している。a)については、生活美術への強い関心と高い評価をもたらすに至った背景、および、特にジャポニズムと関わるコレクション形成の実態について考察し、とくに、近代日本における美術行政との関連調査に関し、その研究成果の一部を公表した。(美術研究350) b)については、欧米の美術理念の導入、美術行政との関連、および外国文化受容の方法論といった視点から考察し、博覧会の出品分類における概念用語の造語の研究、外国文化の吸収過程の比較研究、日本での美術史学に関する研究等を進行させており、その研究成果の一部を公表した。(美術研究353) <三輪、佐藤、山梨>

2. 来迎を中心とする浄土教美術の研究(4年計画の第1年次)

我国の浄土教美術はこれまでもしばしば研究され、その成立と展開は概ね明らかにされてきたが、とりわけ来迎美術に顕著な展開をみせるその独自性については、なお解明すべき多くの問題が残されている。加えて近

調査研究

年では、中国（唐～宋）および朝鮮（高麗）の浄土教美術の作品も知られるようになった。

本研究では、我国浄土教美術の展開における諸相の解明を深めていくとともに、中国・朝鮮における浄土教美術との比較検討を行い、総合的な視点からその特質を明らかにする。

(1) 8～9世紀における日本・中国の浄土教美術の比較

古代日本と中国の浄土教美術に関する基礎研究の一環として、当麻曼荼羅と敦煌莫高窟観経変相図の来迎表現の比較を、テキスト解釈とその絵画化、画面構成の各面についておこない、当麻曼荼羅が占める中日浄土教美術史上の位置について考察した。

(2) 平安時代における密教系と浄土教系阿弥陀如来の関連

10～11世紀を中心とする阿弥陀如来像を、天台宗における浄土教思想の関連に注意しながら整理した。特にその中で、源信『往生要集』では密教系浄土思想の基盤に立ちながら、表面には顕教系浄土思想のみが現われることに注意した。そしてその具体的作例として京都・真正極楽寺阿弥陀如来立像を捉えようとした。この問題は来迎印阿弥陀立像の成立を探ることにつながると考えている。

(3) 平安後期～鎌倉初期における阿弥陀来迎美術、及びその中国・朝鮮美術との比較

従来の来迎美術研究の成果にもとづき、絵画にあらわれる仏、菩薩のさまざまな姿かたちを抽出、整理した。これをもとにして来迎に関連あると考えられ彫像の網羅的な収集に努めた。その結果、従来、来迎彫像としてとりあげられてきた作品以外に、彫刻史における来迎美術研究に有効ないくつかの関連作品を加えることができた。それらの概要は美術部・情報資料部公開学術講座(1991.12)で発表した。

(4) 宋代江南地方を中心とする浄土教美術と西域地方・朝鮮・日本等周縁諸地域における浄土教美術との比較

中国宋元時代の江南地方および同時期の朝鮮半島における高麗時代の浄土教美術について、その基礎資料を収集した。とくに、中国寧波地方の浄土教美術については、その研究成果の一部を美術部・情報資料部公

開学術講座(1991.12)で発表し、寧波の天台寺院であった延慶寺を中心とする浄土信仰と現存する寧波仏画との関係に言及した。〈三宅, 井上, (情) 井手, 長岡〉

3. 美術に関する基礎資料の研究

(1) 絵巻資料

梅津次郎氏旧蔵絵巻資料の点検

寄贈された資料は、絵巻関係ネガ・フィルムと撮影台帳、作品別焼付け写真、作品別資料ファイルの三つに大別される。

- 1) 本年度は、ネガフィルム(約400本)について、昨年度に引き続いて密着写真(35ミリ判及び6×6判)を作成した。
- 2) 撮影台帳のデータ化も順調に進めており、本年度は、昭和40年度以降の撮影分について、データ入力を行った。
- 3) 9月には、奈良国立博物館所蔵の絵巻資料について調査を行った。

〈(情) 米倉, (調) 佐野, (共同研究員) 村重寧, 大西昌子, 千野香織〉

(2) 関東所在水墨画資料

下記的美術館・博物館に於て、室町水墨画及び関連作品の調査を実施した。

根津美術館

神奈川県立博物館(新収資料)

収集資料については、逐次、整理を行い、併せてデータベース化を進めた。

本年度より、これまで調査で収集した絵画作品の美術史的解明とあわせて、13世紀より16世紀における水墨画家(約60名)に関して基礎資料の収集と研究史の整理に着手した。この作業については、定期的に研究会を開催し、研究グループ内での問題の共有化を図ることにした。今年度は、宅間長祐・宅間栄賀・式部輝忠について、基礎資料の収集と研究の現状についての研究会を行った。

〈島尾, (情) 井手, (共同研究員) 河合正朝, 横田忠司, 相沢正彦, 大石利雄, 山下裕二, 小川知二, 坂口薫, 敕仁郷秀明〉

調査研究

(3) 明治後半期美術史料

1) 明治後半期の内外博覧会資料の収集整理

- a) 内外の博覧会の概要を把握するため、それらに関する文献所在調査を前年度に引続き行い、第2回目の中間報告として「内国勸業博覧会・万国博覧会関係文献所在目録(Ⅱ)」(美術研究353)を出した。調査を行った機関は、東京国立博物館、東京大学工学部、外務省外交史料館、東京都中央図書館等である。
- b) 東京国立博物館所蔵の内外博覧会(第一、二回内国勸業博覧会、第一回内国絵画共進会、ウィーン、フィラデルフィア、パリ、シカゴ、コロンブス万国博他)の写真帖を調査し、約800カットの写真撮影を行った。

2) 明治後半期の美術展覧会資料の収集と整理

a) 展覧会出品目録の収集と整理

明治美術会、日本美術院・日本絵画協会、白馬会展をモデルにその出品目録のデータ・ベース化に着手した。

b) 美術雑誌等の彙報欄記事の収集

c) カタログ・図書類等所載年表の収集

<三輪、佐藤、山梨>

(4) 日本絵画史年記資料集成十五世紀

本研究は、すでに刊行された『日本絵画史年記資料集成十世紀～十四世紀』(1984)を継続するものである。

- 1) 源豊宗編『日本美術年表』・集英社版『原色日本美術年表』に掲出された1401～1500年の記事の中から絵画に関する項目約140件を抜粋した。落款、奥書、賛文、銘記などに年紀をもつ例の他、作者、賛者の没年等から制作年代の推定できる例も参考資料として同様に抜粋した。

- 2) 抜粋項目に取り上げた作例1点ごとについて、論文・論説・紹介など、内容と図版の有無を基準にして主要参考文献の収集を開始した。

- 3) 収集した資料は、将来のデータベース化への移行を考慮し、随時データファイル化を行った。

< (情) 鈴木, (共同研究員) 井沢英理子, 亀井若菜, 松尾知子, 松木理砂 >

2. 芸 能 部

(1) 概 要

芸能部は、日本の伝統芸能に資するために必要な基礎研究を行うことを目的とし、演劇研究室・音楽舞踊研究室・民俗芸能研究室の三室によって構成されている。芸能部の研究目標としては、諸芸能の理念・構造・技法およびその継承保存に関する研究などがあり、その研究に必要な資料の収集・整備、および記録の作成のための撮影・録音・録画などの作業を行う。また、研究の成果は刊行・夏期学術講座・公開学術講座などによって公表する。

平成3年度は、特別研究「仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究」(4年計画)の最終年次にあたり、4年間にわたる部をあげての調査研究を締めくくった。

演劇研究室

日本古典演劇について芸能学的に調査・研究を行い、また、これら諸芸能の周辺にあって、伝統芸能の成立に深い関係をもつ諸分野についても調査研究を進めている。

平成3年度は、個人研究として「寺院行事の研究」「絵画資料による近世演劇の研究」、共同研究として「能楽の芸能学的調査研究」を行い、また共同研究「仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究」に参加した。なお、「寺院行事の研究」では、特に過去20年にわたって調査・記録を行った録音資料に基づいて、諸宗派の悔過法要形式の比較分析を行い、これと並行して、前記資料の永久保存のためのPCMダビングの作業を継続している。

音楽舞踊研究室

日本の音楽と舞踊について、芸能学的・音楽学的な調査研究を行い、これら伝統芸能の成立に深い関係をもつ周辺分野についても、調査研究を進めて

調査研究

いる。

平成3年度は、個人研究として、「日本音楽各種目の独自性と相互影響の研究」「日本舞踊における技法の相互影響の研究」を行ったほか、共同研究「仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究」・「能楽の芸能学的調査研究」に参加した。

民俗芸能研究室

全国各地に分布伝承される民俗芸能を対象とし、それらの保存・継承に資するために必要な研究を行っている。

平成3年度は、個人研究として「民俗芸能における採り物の研究」「上方落語の研究」、共同研究として「民謡歌詞の様式研究」を行い、「仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究」・「能楽の芸能学的調査研究」に参加した。

(2) 各 論

1. 仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究(4年計画の第4年次)

わが国の伝統的な行事や芸能が、仏教との関わりの中に展開してきた様相を具体的に解明し、文化史的・芸能史的位置づけを行うことを目的として、研究対象に“延年”を取り上げたものである。

本年度はその最終年次であるが、昨年度に引き続いて“延年”の実態把握を主眼としながら、下記の調査研究を行った。4か年間の成果は「芸能の科学21」で公表する。

- (1) 伝存事例の中で古態を伝えていると思われるものの実地調査：宮城県・白山神社「小迫の延年」、岩手県・中尊寺「白山宮祭」の録音・VTR録画・写真撮影等。
- (2) 関連芸能の実地調査：山形県・春日神社「黒川能」、山形県・熊野大社「稚児舞楽」、秋田県・金峯神社「延年チョウクライロ舞」のVTR録画・写真撮影等。
- (3) 関連史料の調査：山形大学所蔵慈恩寺史料および奈良県立美術館所蔵多武峯談山神社史料。

- (4) 研究会開催；植木行宣、松尾恒一両氏の講話および両氏と当部研究員全員による討論。

2. 能楽の芸能学的調査研究（5年計画の第2年次）

舞台芸術としての能楽の技法を多角的にとらえることを目的とし、今年度は下記の調査研究を行い、成果の一部を第15回国際研究集会で公表した。＜代表者、羽田＞

- (1) 能本の構造と演出の研究；復曲活動の実際面の検討を通して、能の「演出」の変遷と意義について考察した。＜羽田＞
- (2) 仏教典礼と能；論義法要から能の〈ロンギ〉への展開について、能の現行演目を作者別、曲籍別に考察した。＜佐藤＞
- (3) 能の音楽的研究；近世芸能に対する能楽の影響を、主として音楽面から考察した。＜蒲生＞
- (4) 各地伝存の祭礼における能楽の構成と芸能；伝存事例の現地調査による資料の収集を行った。＜中村＞
- (5) 近世演劇と能の関係；劇書類から用例の抽出と挿絵の検討を行い、成果の一部を夏期学術講座で発表した。＜鎌倉＞

3. 寺院行事の研究（7年計画の第7年次）

寺院行事が内包する多様な要素の中から芸能的要素を抽出し、各宗派にわたる調査研究を行い、その変遷・分化をあとづけた。今年度は、悔過会とその周辺の諸問題－懺悔の法要形式、呪的表現法、所用声明の意義と表現－について考察し、その成果の一部を公表した。＜佐藤・高橋＞

4. 絵画資料による近世演劇の研究（3年計画の第2年次）

近世風俗画および絵入り狂言本・絵入浄瑠璃本の挿絵を比較検討し、当時の舞台構造や演出および観客の要求について考察し、その成果を夏期学術講座で発表した。また、近松作の絵入狂言本について考察し、その成果を「芸能の科学20」に公表した。＜鎌倉＞

5. 日本音楽各種目の独自性と相互影響の研究（5年計画の第3年次）

催馬楽、平曲、能楽その他を個別に取り上げた。そのほか、各種目に共用される理論用語「中」について考察し、その成果を「芸能の科学20」に公表した。また、所外の研究者をまじえての、長唄正本と『御屋敷番組控』

調査研究

の共同研究を継続した。＜蒲生＞

6. 民俗芸能における採り物の研究（8年計画の第7年次）

民俗芸能を総合的な視野で把握するために、各種目の構造・技法分析の一環として、さまざまな目的で用いられている採り物、特に扇および武器について考察し、扇については成果の一部を「芸能の科学19」に公表した。また、武器については基礎調査を行った。＜中村＞

7. 日本舞踊における技法の相互影響の研究

今日演じられることの少ない舞踊作品に見られる“振り”をもとに、技法の変遷・伝承の背景を考察し、その成果を「芸能の科学20」に公表した。＜丸茂＞

8. 民謡歌詞の様式研究

全国的な民謡歌詞調査結果に基づき、東北地方・近畿地方の歌詞カードの作成を終了し、引き続き関東地方について作業を進めた。＜中村・三村＞

9. 上方落語の研究

「忠臣蔵」に受容された落語の分類および近世庶民生活への「忠臣蔵」の影響調査を行った。その成果の一部を「芸能の科学19」に公表した。＜三村＞

3. 保存科学部

(1) 概要

文化財の材質・構造・技法および劣化機構の科学的研究ならびに文化財のおかれている保存環境の科学的研究を行い、これらを基盤として文化財保存の技術開発に関する研究を行っている。言い換えれば、文化財の自然科学的研究、文化財を資料とする科学技術史的研究、文化財の保存のための科学技術の応用研究の3方面である。研究組織は化学研究室、物理研究室、生物研究室の3室からなり、研究成果は修復技術部と共同編集の機関誌「保存科学」により公表され、文化財の指定・保存対策・修復処置の基礎資料として役立てられている。

化学研究室

化学研究室では文化財の材質ならびに保存環境に関する問題点を化学的手法を用いて調査・研究している。X線分析法、光学的分析、質量分析法などを用い主として金属文化財に関する劣化、保存対策、材料推定などの問題点の研究を進めている。また文化財を取り巻く環境について大気汚染、酸性雨などの影響について汚染度の測定、影響評価法の研究を行っている。

物理研究室

物理研究室では文化財の材質ならびに保存環境に関する問題点を物理的手法を用いて調査・研究している。文化財の材質、構造の調査方法としてγ線・X線・赤外線などを用いている。また展示、収蔵、梱包などの文化財を保存する環境の評価と劣化防止の方法について研究を行っている。

生物研究室

生物研究室では文化財の保存に関する問題点を生物学的な見地から調査・研究している。文化財の生物による劣化、すなわち微生物や昆虫等による被害の実態を調査して、これら加害生物がおよぼす劣化の原因と機構を明らかにし、加害生物の防除法の研究と開発を行っている。

(2) 各 論

1. 鉄器材質の歴史的変遷に関する研究（3年計画の第1年次）

本年度は鉄器原料の産地を推定することを目的として、鉛同位体比法が応用できるかどうかについて基礎的研究を行った。

古代鉄中における鉛濃度は銅製品の場合よりかなり低いことが予想されたので、実験室の整備および分析法に改良を加えた。鉄試料中の鉛濃度を幾つかの試料について測定したところ、古墳時代の鉄器で約0.1～0.01ppm程度であることが分かった。これは銅製資料における鉛濃度、約100～10ppmと比較して、約1/100から1/1000という少ない量であった。この資料について鉛同位体比を測定したが、結果は得られなかった。これは精製した鉛の中に微量の鉄が残っており、質量分析計の中で鉄が鉛の蒸発を妨害

調査研究

したためと推定される。現在、分析化学的に鉛の分離法について再検討中である。＜平尾、馬淵＞

2. 文化財の伝統的保存修復材料に関する研究（4年計画の第3年次：修復技術部と共同）

35頁、修復技術部の項参照

3. 有機質文化財の光による劣化の定量的評価法の確立（6年計画の第3年次）

昨年度に引続き、紫外線照射（短波長、長波長）、オゾン曝露などで強制劣化させた絹について、ESR、化学発光などによる状態分析を行い、レーザー顕微鏡を用いた外見上の変化の観察を行った。レーザー顕微鏡を用いた観察では紫外線劣化させた絹に電子顕微鏡で観察されたような微細な亀裂がみられず、これらの亀裂は光劣化が直接の原因で生じたものではないことがわかった。おそらく紫外線によってきわめて脆くなった絹が前処理の蒸着の時に、減圧により繊維の重なるの部分に力がかかり、亀裂が生じたものと考えられた。この他、ESRや化学発光の測定では、劣化条件や試料の大きさなどをできるだけそろえて測定を行い、鎌倉初期の絹など経年変化した試料との比較を進めている。＜佐野、三浦＞

4. 特殊環境に置かれた文化財の保存条件の検討（8年計画の第3年次）

(1) 新設博物館内の環境

新設博物館館内には、コンクリートからアルカリ性物質を含んだ水分が多量に蒸発してくる。この「アルカリ因子」が文化財の材質にどんな影響を与えるのか、曝露実験を継続中である。フィールドとしては、滋賀県大津市歴史博物館の収蔵庫床下ビット内および静岡県島田市立博物館一階展示準備室内を選んだ。環境判定のために、アモニ油含浸紙と並行して、アンモニア濃度測定用として試験中の硫酸銅溶液含浸紙を用いている。また、コンクリート塊を使用するモデル実験で、漆塗膜および絹に対する影響を試験している。＜佐野、三浦＞

1) アルカリ因子についての再考

「アルカリ因子」についての過去の研究例を集約し、化学的な側面から評価し、アンモニア濃度簡易判定紙の開発研究を行った。

「アルカリ因子」の1つと考えられるアンモニアの、環境中の濃度を簡単に判定できるような試験法の開発を計画し、硫酸銅によるアンモニア捕集（銅アンミン錯体生成）の実験を行った。デシケーター中のモデル実験では、曝露時間に伴いアンミン錯体の生成がESRで認められ、また、色も変化した。現在、新設博物館中で試験的に使用を開始している。またデシケーター中にコンクリート塊を設置し、絹、油絵顔料、漆膜などにおよぼすアルカリ因子の曝露試験を行っている。＜佐野＞

2) 展示・収蔵環境に関する調査・指導

下記の博物館、美術館、資料館などの館内環境について、温湿度、照明、汚染因子等の調査を行い、適切な条件で作品の収蔵・展示ができるよう指導した。総数26件＜石川＞

所在地	館名
秋田県	秋田市千秋美術館
福島県	双葉町歴史民俗資料館
茨城県	県立歴史館
栃木県	なす風土記の丘歴史民俗資料館
千葉県	松戸市郷土博物館
東京都	江戸東京博物館
富山県	県立立山博物館
福井県	県立朝倉遺跡資料館
静岡県	島田市立博物館
三重県	普賢寺収蔵庫
滋賀県	安土城郭考古センター
大阪府	吹田市立博物館
兵庫県	伊丹市美術館
兵庫県	尼崎市歴史博物館（仮称）
島根県	安来市産業考古館（仮称）
島根県	益田市雪舟記念館
広島県	県立風土記の丘歴史民俗資料館

徳島県	県立美術館
徳島県	徳島市徳島城博物館
香川県	詫間町民俗資料館
高知県	県立歴史民俗資料館
福岡県	芦屋町歴史民俗資料館
福岡県	太宰府天満宮宝物殿
佐賀県	唐津市美術展示ホール
熊本県	八代市博物館
大分県	大分市歴史資料館

(2) 都心部およびその周辺部における酸性汚染物質の文化財への影響

環境汚染が文化財におよぼす影響の評価法を検討する目的で、東文研屋上、黒田記念室、収蔵庫において環境中の酸性ガス(NO_2 , SO_2)、酸性ミスト(Cl^- , NO_3^- , SO_4^{2-})濃度を測定し、同一場所で銀・銅・石灰石等のテストピース曝露試験を行い、テストピースの変質量と汚染因子濃度の関係を定量的にとらえることを行っている。

都心部および周辺部における酸性汚染物質の文化財への影響環境汚染が文化財におよぼす影響の評価を検討している。

東文研屋上および都内郊外での環境中の酸性ガス(NO_2 , SO_2)濃度、酸性ミスト(Cl^- , NO_3^- , SO_4^{2-})濃度等を測定し、また同一場所で石灰石のテストピース曝露試験結果は、石灰石の重量は約0.24%減少し、雨のpHは5.2~5.4の酸性を示していた。酸性イオン濃度は、 F^- , Cl^- , NO_3^- , SO_4^{2-} それぞれ0.5, 15.0, 7.5, 6.5ppmであった。〈門倉〉

5. フォクシングの保存科学的研究(4年計画の第3年次)

本研究は、フォクシングの要因と形成のメカニズムを微生物学的観点から究明し、修復方法の確立を目的とするものである。昨年度までの研究で、フォクシング部位でグルコースと γ -アミノ酪酸が検出され、この2成分が反応して褐色となり、フォクシングを形成すると考えられた。そのため、今年度は、この2成分から合成した褐色物質の単一成分を抽出し、その構造を明らかにしたいと考えた。しかし、合成褐色物質から蛍光物質を精製する過程で、単一蛍光スポットを形成する試料が少なく、構造を決定する

までには至らなかった。今年度の研究で、合成した褐色物質は複雑な構造の物質の混合物であり、単一物質の精製にはかなり時間を要することが明らかとなった。＜新井＞

6. 文化財の材質・構造・技法に関する研究

(1) 鉛同位体比を利用した銅製品、青銅製品の材料産地推定

東京国立博物館、各地教育委員会、発掘事務所、埋蔵文化財センターなどから、各種の青銅製品、発掘・出土銅製品、伝世の仏像などに関して鉛同位体比測定の依頼があり、これらを測定し、材料産地の推定を行った。一般研究での今年度測定資料数は約30件。＜平尾＞

- 1) 佐賀県長泉寺山古墳出土の銅鏡など3点を分析した。中国南部の鉛同位体比を示した。
- 2) 佐賀県本村籠遺跡出土青銅製品3点の分析より、これらが朝鮮半島製の材料を利用していることが分かった。
- 3) 広島県木の宗山出土の銅鐸、銅剣、銅戈3点を分析した。
- 4) 奈良県藤ノ木古墳出土帯金具を分析し、産地に関する情報を得た。

(2) 蛍光X線分析法を利用した研究

東京国立博物館、各地教育委員会、発掘事務所、埋蔵文化財センターなどから、各種の青銅製品、発掘・出土銅製品、伝世の仏像などに関して蛍光X線分析の依頼があり、これらを測定し、材料の化学組成を報告した。資料数は約180。＜平尾＞

- 1) 熊本県船山古墳出土金銅製品、金製品など10点を分析した。
- 2) 広島県木の宗山出土の銅鐸、銅剣、銅戈を3点分析した。
- 3) 群馬県観音山古墳出土銅製品を20点分析した。
- 4) 東京国立博物館法隆寺宝物館より四十八体仏の光背を40点分析した。
- 5) 東京国立博物館小倉コレクションの朝鮮仏53体を分析した。
- 6) 東京上野、輪王寺の天海僧正座像の調査。被災にともなう修理のため、塗料の蛍光X線、EPMA分析を行った。資料数約10点。

(3) X線回折分析法を利用した研究

- 1) 奈良県薬師寺の銅製文化財に関して保存科学的な立場から、発生し

調査研究

ている鎔の化学物質を明らかにした。資料数約30点。＜平尾＞

- 2) 静岡県浜松市郊外の細江町で出土した銅鐸の鎔が埋蔵環境から発掘後の空気環境でどのように変化するかを追跡調査した。資料数約20点。＜平尾＞

(4) X線透視撮影による調査研究

下記の作品の撮影と調査を行った。

作品名	所蔵者(依頼者)
善導大師立像	善導院(文化庁)
朱漆梅月螺鈿六角盆	沖縄県浦添市美術館
蟹の盃台からくり	個人(国立科学博物館)
ロダン「カリアティードとアトランタ」	新潟県美術博物館

(5) 赤外線、エミシオグラフィおよびX線透視撮影による研究

平成3年度は、東京国立近代美術館、大倉集古館、ブリヂストン美術館の所蔵する絵画15点について撮影と調査を行った。＜三浦＞

7. 材質の劣化に関する研究

(1) 風邪ひき紙

風邪ひき紙の表面物性について検討している。局部的に親水性の異常に上がった状態が「風邪引き」であるが、水中で完全に濡らすと見かけは健全に戻ることがわかり、発生原因およびその機構を検討している。＜佐野＞

(2) 絹の劣化度を定量的に判断する分析手法の検討を継続中である。

本年度は、ESR および化学発光による検討を主として行い、発光量と積算照度との相関、発光スペクトルの測定、劣化促進時間とラジカル量の相関を明らかにした。＜佐野＞

(3) 絹の強制劣化方法の開発

高湿度下でオゾン曝露した絹の表面に、Ca, Zn, Cu, Al などを含む結晶の生長が見られたので、原因を追及するとともに劣化方法の改良を検討中である。＜佐野＞

(4) 箱根町元箱根石仏群の劣化状況の調査

箱根町の依頼により元箱根石仏群の劣化状況の調査を行い、6月から六道地藏周辺の気象観測を行っている。また小高町薬師堂石仏も継続して調査した。環境に関する調査は、次の地点で、温度・湿度などの気象観測を継続して行っている。＜三浦＞

史 跡 等 の 名 称	観 測 項 目	観測開始時期
小高町薬師堂石仏	温湿度・表面温度	1985年12月
中尊寺金色堂	温湿度・変位	1986年3月
同讚衡蔵	温湿度	1991年6月
三殿台遺跡住居跡	温湿度・表面温度・日照	1989年4月
元箱根石仏群	温湿度・表面温度・日照 風向・風速・雨量	1991年6月

8. 生物被害の調査と対策

(1) 展示ケース壁面のカビ

東京国立博物館の展示ケースにカビが発生し、その調査と対策を求められた。

今回は防除対策（処置）を講じたが、本展示ケースについては対症療法ではなく、展示ケースの性質を正確に把握する必要があることを提言した。

(2) 曾候乙墓特別展で発生したムシ

東京国立博物館で開催された曾候乙墓特別展(3月17日～5月10日)で、展示中の漆棺からムシが出現した。これは、ゴミムシダマシで漆棺の木材等の加害と直接関係はないが、多数生息している可能性があるため燻蒸処理した。処理後約100個体の成虫を回収した。

(3) 法隆寺 蔵国宝・四騎獅子狩文錦の調査

四騎獅子狩文錦の収納ケースにカビが着生している懸念があつて、調査の依頼を受けた。カビは収納ケースの外側に散見されたが、内部には及んでいなかった。収納ケースは密閉度よく、調湿剤の収納箱も備え付けられている。今後は、収納ケース内の相対湿度を調湿剤で60～70%RH

に保つ管理体制の確立を進言した。

(4) Burke Collection の虫害対策

在外日本美術調査の一環で、Burke Collection の調査の際、木造彫刻に虫粉が認められ、その対策を求められた。虫粉は主としてシバンムシの糞であり、燻蒸法等の対策を報告した。

(5) 重要文化財・丹生都比売神社楼門の虫害

丹生都比売神社楼門の修理にあたり、マツ材に甚大な虫害が認められ調査を依頼された。この被害は、シバンムシよりも大形の昆虫の食痕であり、カミキリによるものと推定した。被害材から成虫の羽化を待ち、種類を特定した。従来、カミキリの被害を見落していた可能性があるもので、全国的な調査を要する。

(6) 重要文化財・金剛証寺の建築彩色

金剛証寺の本堂修理工事にあたり、本堂は極めて高湿度の環境にあるため、これまで丹塗りにカビの被害を受けてきた。その対策を求められたので、膠に混入する防黴剤を手板で比較検討して決定する。

(7) 瑞鳳殿漆塗建築物劣化の調査

瑞鳳殿を再建して12年が経過し、漆塗膜の剝離等が著しいので、再塗装を実施するにあたり調査委員会を発足させて、基礎的な検討を行うことになった。

<新井・山野>

4. 修復技術部

(1) 概要

文化財の修復に関する調査研究、科学的修復方法の開発研究とその公表、応用を主務としている。研究の対象は美術工芸品、建造物、考古資料、民俗資料などの有形文化財をはじめとした、文化財のすべてを含んでいる。組織としては、文化財を構成する主材料に合わせて3研究室からなっている。

第一修復技術研究室

工芸品、建造物など木材および漆を主な材質とする文化財の修復に関する科学的、技術的研究を行い、その成果の公表を行っている。

第二修復技術研究室

絵画、書籍、染織品など紙・繊維または、皮革を主材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的研究とその成果の公表を行っている。

第三修復技術研究室

建造物、考古資料、美術工芸品など金属、石材、その他無機材質を主材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的研究とその成果の公表を行っている。

科学的な修復方法の開発は、合成樹脂を利用した修復やプラズマ法による保存処理などに大きな成果をあげている。

文化財の修復に関する研究は、文化財そのものの材質、製作技法に関する科学研究を通して、相互の関係を明らかにすることが重要な課題である。平成元年度から修復技術部の中長期研究テーマとして『文化財の伝統的保存修復材料に関する研究』を4か年計画で着手し、今日に継続している。

また、屋外にある不動産文化財の保存が酸性雨等の被害で今日的な問題となりつつある現況を踏まえ、『屋外にある文化財の劣化過程の調査と修復方法の研究』をテーマとする共同研究を平成元年度から5か年計画で発足させ3年次を終えた。

(2) 各 論

1. 文化財の伝統的修復材料の研究（4年計画の第3年次：保存科学部と共同）

(1) 物性に関する調査研究

1) 膠着剤（漆・膠・糊・天然樹脂）

a) 布海苔・膠など

壁材に用いられている膠着剤の同定をFTIRによってアミノ酸分析、糖分析を試みた。膠と布海苔類とカゼインの識別および同定、また布海苔とツノマタの識別・同定が可能であることが明らかになった。ツノマタの採取地域による差異も小さいことが判った。膠では鹿膠、牛膠等の動物種を同定することは出来なかった。＜川野辺＞

b) 鉄タンニンによる染織製品の劣化

脆弱化が速い黒染め染織品の修復法を確立するため、染色工程中の金属類の移動を追跡しながら、黒染めの伝統技法の解明をおこなっている。

文献調査から、茶色染めも鉄タンニン染めと解釈したほうがよいことが判明した。分析によって媒染剤として使用される金属の量が予想以上に少ないことが判り、現在絹繊維に染料が染着する時間的推移を追跡中である。＜増田・川野辺＞

(2) 修復材料

1) 補絹用絹

オゾンと長波長の紫外線を用いて、文化財修復用の絵絹の開発を行っている。

オゾン劣化法は、劣化時間も短く実験装置も簡便である。紫外線劣化絹の方が、オゾン法による劣化絹に比較して劣化の進行度合い、色味、柔軟さなどで、自然な経年劣化による劣化絹の状態に近く修復材料として適していることが判明した。装置の改良により劣化時間を大幅に短縮し、より大面積の試料作製と実験条件の最適化を検討している。＜川野辺＞

2) 材料に関する調査

低温薄膜脱水法によって生漆中の酵素とゴム質を微粒化した精製漆を、従来の精製漆と比較するため、塗装手板を製作し耐候性試験を行っている。約8か月を経過したが、従来の精製漆は下地を露出し、低温薄膜脱水法で製作した精製漆は、光沢が少なくなる程度にとどまっている。どの程度の耐候性を示すか実験を継続中である。＜中里＞

2. 屋外文化財の劣化過程の調査と修復法の開発（5年計画の第3年次）

(1) 塗装材料・技法

1) 海浜地域における建造物塗装の研究

海浜などの特殊な環境下における伝統的塗装材料と合成塗料の耐候性および、劣化特性を現地暴露、促進劣化実験などで検討した。島根県日御碕神社や広島県厳島神社大鳥居などで、合成樹脂に伝統的顔料を混和した新素材を用いた現地暴露実験を行った。日御碕神社では、実験結果を参考にして最終塗装仕様を決定し、回廊および楼門の一部に塗装試験を行った。また半年間の温湿度測定によって高湿度期間が長く、また木材水分含有量も高いことが分り、塗装条件が非常に厳しいことが判明した。＜川野辺＞

2) 海浜地域における装飾金具の耐食性実験

日御碕神社の装飾金具は、日本海からの強い海風によって著しく腐食している。実験の目的は、このような厳しい環境下に耐える金具の開発にある。

5×6cm×厚さ0.5mmの耐食性銅板に金メッキ、電着塗装処理等をした試験サンプルを作り、現地暴露、塩水噴霧、キャス試験、ウェザーメーターなどの腐食試験を行った。その結果3ミクロン以上の金メッキを行い、その上にアクリル樹脂を電着塗装したものが最も良い耐食性をしめした。＜青木＞

3. 文化財の材質・構造・技法に関する研究

漆

(1) 漆塗建造物の調査

重要文化財高台寺霊屋内奥の間の漆塗須弥壇の破損状態を調査した。須弥壇は来年度修理される予定であり、そのための資料を作成し、京都府に報告した。＜中里＞

(2) 正倉院伎楽面の調査

脱乾漆及び木製伎楽面37面の破損状態調査を行い、修復方法について検討した。＜中里＞

(3) 漆芸品の調査

調査研究

重要文化財秋野蒔絵手箱（遠山美術館），蒔絵菩薩立像（東京国立博物館），重要文化財木造菩薩座像（白毫寺）の技法調査を行った。＜中里＞

4. 材質の劣化に関する研究

紙質文化財

紙の種類によるフォクシング発生の難易の研究を行った。試作した手漉和紙にフォクシング要因糸状菌2種の胞子を接種したがフォクシングの再現が出来なかったため、ブドウ糖を滴下して培養を継続している。＜増田＞

5. 文化財修復技術

(1) 木造文化財

1) 建造物彩色の剥落止め

近世・近代の木造建造物内部彩色の剥落止めを垂直面や天井面で施工するための材料・手法の開発研究を開始した。鳥取県大神山神社，大分県願成院，福島県飯野八幡宮などで実施条件の検討を行っている。

2) 特殊環境下の塗装材料・施工方法

重要文化財巖島神社大鳥居の修復仕様の検討を行っている。修復対象が海中に立地するために，海水中で施工可能な材料等特殊な材料と施工方法の開発が必要とされている。＜川野辺＞

(2) 漆文化財

中村記念美術館蔵南蛮人蒔絵硯箱

保存科学部の協力で箱表面の金属板の成分を蛍光X線分析で調査し，腐食状態をX線透過写真で確認して，腐食部分の修復を行った。金属は鉛錫合金であった。＜中里＞

(3) 紙質文化財

水害を受けた文書の真空凍結乾燥処置

集中豪雨による書庫内への漏水で，江戸時代から明治にいたる冊子本54冊が水害を受けたので，凍結して輸送し，研究所内に設置している真空凍結乾燥機で乾燥処置を行った。冊子の種類による乾燥期間を予測するために和紙の冊子と洋紙の冊子の乾燥温度と乾燥速度の関係を調査した。凍結により水性染料のにじみや黴の発生が防止でき，また乾燥に要

する人手の軽減がはかれることが同法の利点であった。＜増田＞

(4) 金属文化財

錆の安定化処理

水素プラズマ等を用いて鉄錆の安定化処理の研究を行っているが、水素ガス4、酸素ガス4、アルゴンガス2の割合で混合したプラズマ中で処理を行うと、水素、窒素、アルゴン処理よりも脱塩効率が良いことが判った。鉄錆に覆われた象嵌遺物をプラズマ処理して象嵌の表面の錆をメスなどで簡単に除去する方法を開発した。この方法によって象嵌を傷つけることなく、しかも象嵌技法が良く認識できるように処理することが可能になった。＜青木＞

(5) 遺跡・遺構の保存修復

遺構を保存するため、土壌含水率を土壌の収縮限界内にコントロールする樹脂を開発して横浜市三殿台遺跡などで実験を行ってきたが、処理部分の土壌は、未処理の土壌に比べて20%程度土壌含水率を高く保持できることが土壌水分の連続測定によって判明した。またこの樹脂に、土壌表面に繁殖する苔やカビを防止する効果があることも判った。

覆屋によって保存されている文化財の保存上の問題を把握するための悉皆調査を開始した。本年度は群馬県を対象とした。＜青木＞

6. 受託研究

(1) 隈・西小田遺跡出土銅戈の保存修復研究（福岡県筑紫野市）（保存科学部と共同）

福岡県筑紫野市隈・西小田遺跡から発見された銅戈の保存修復処置の研究と材質の調査と、原料産地推定を行った。（3年計画第3年次）

＜保存修復＞…銅戈

- ・超音波メスによる泥や錆のクリーニング
- ・ソクスレーによる脱塩処理
- ・ベンゾトリアゾールによる銅の安定化処理
- ・インクララックによる減圧含浸強化
- ・破損した破片の合成樹脂による接合と補修

＜分析調査＞

調査研究

蛍光X線分析，X線回折分析，鉛同位体比分析を行った。

- (2) 舟塚古墳出土金属遺物の保存修復研究(茨城県歴史館)(保存科学部と共同)

舟塚古墳から発見された鉄製品および銅製品の保存修復処置研究と材質調査および原料産地推定を行った。(3年計画第2年次)

〈保存修復〉…銅製品

- ・超音波メスによる泥や錆のクリーニング
- ・新開発した脱塩装置による脱塩
- ・ベンゾトリアゾールによる銅の安定化処理
- ・インクララックによる減圧含浸強化
- ・破片の樹脂による復元

…鉄製品

- ・超音波メス，エアブラッシュなどによる泥や錆のクリーニング
- ・水素プラズマによる錆の安定化処理
- ・新開発した脱塩装置を用いた脱塩処理
- ・チタネートシラン樹脂による錆の安定化処理
- ・アクリル樹脂による強化
- ・破片の樹脂による接合と補修

〈分析調査〉

蛍光X線分析，X線回折分析，鉛同位体比分析を行った。

- (3) 徳永川の上遺跡出土金属遺物の保存修復研究(福岡県教育委員会)

川の上遺跡は弥生時代から古墳時代への移行期のもので，古墳が形成されていく過程を研究するためにかかせない遺跡である。

銅製品の保存修復処置研究

〈保存修復〉…銅製品

- ・超音波メスによる泥や錆のクリーニング
- ・新しく開発した脱塩装置による脱塩
- ・ベンゾトリアゾールによる銅の安定化処理
- ・インクララックによる減圧含浸強化
- ・破損した破片の樹脂による復元

(4) 風邪引き紙の研究

風邪を引いた紙について、その現象を究明するために行った処置によって、風邪引き現象が回復することを発見した。それはサクシオンテーブル上で温水を注ぐ方法で、短時間の処置で効果が現れる。大型の紙の場合でも、温水浴を10分程度行えば風邪引きが回復することを確認した。

また、同温異湿状態で紙の吸着水分量を測定した結果、同一含水量における水分活性（平衡湿度）は雁皮紙が他の紙に比べて低いことが確認された。これは雁皮紙に黴の発生が少ないことに関連すると考えられる。

5. 情報資料部

(1) 概 要

情報資料部は、従来美術部資料室の行ってきた美術に関する研究資料の作成、収集、整理、保管、閲覧等の業務を充実発展させ、さらに当研究所各部所掌の研究資料に関する情報の統合化をはかることを目的とする。

当部所管の諸資料は美術部創設以来内外の研究者の利用に供され、文化財に関する研究資料センターの役割を果たしている。この機能をより充実させ、学術情報の増加と多様化に対応した所蔵研究資料の効果的利用を図るため、データの共有化を中心とする美術情報処理システムの研究、画像処理技術の応用、文献データベースの開発などを行っている。

当部研究員は、上記業務を行うとともに日本・東洋美術史各分野で研究活動を行っている。調査研究活動の成果は「美術研究」ほか学会誌、美術部と共催の公開学術講座等で発表されている。

当部は、文献資料研究室と写真資料研究室の二室をもって構成される。

文献資料研究室

美術史を中心とした図書・雑誌、調査研究活動によって収集された各種研究資料の整理・保管・閲覧を行っている。また、日本・東洋古美術関係の文献目録の作成とともに文献データベースの開発を行っている。各年分の文献目録は『日本美術年鑑』に掲載し、一定期間ごとに総合・増補し『日本・東

調査研究

『洋古美術文献目録』として刊行している。現在、昭和41年～60年分について編集作業をすすめている。

写真資料研究室

研究用写真資料の作成、収集、整理、保管、閲覧を行うとともに、各研究者の調査研究活動に協力して研究資料を撮影し、資料の充実につとめている。また、これに平行して、美術研究所当時に撮影したガラス原板の転写を昨年度に引き続き実施するとともに、美術史研究への画像処理技術の応用及び画像情報のデータベースに関する研究を行っている。

(2) 各 論

1. 美術情報処理システムの研究 ― データの共有化を中心として ― (10年計画第3年次)

(1) 共有データの生産・蓄積・利用環境の検討

- 1) 文化庁を中心とする文化財情報ネットワークシステムのワーキンググループに参加し、有形文化財データベースのデータ構造に関して検討した。
- 2) オフラインによるデータの共有システムに関して、先年度に引き続き、科学研究費総合研究(A)「美術史研究における基礎資料の共有化とデータベースの活用」(研究代表者 米倉迪夫)により、日本画史画論全文テキストデータ(『本朝画史』など)の入力をおこなうとともに、利用希望諸機関に配布し、効果的な活用方法について情報交換をおこなった。なお、同科研は本年度をもって終了し、研究成果報告書を作成した。また、「歴史系研究支援情報処理の研究」(国立歴史民俗博物館共同研究)に参加し、美術史研究機関におけるデータ生産・蓄積・利用環境の実態把握を継続した。

(2) キーワード辞書の検討

- 1) 先年度に入力済みの中国画史画論全文テキストデータから、主題・人名等の語彙を切り出し、インデックスを作成した。
- 2) 中国歴代著録画目の入力により、主題・人名・書名等の語彙を蓄積

した。

- 3) 既存のキーワード辞書と語彙データベース群のデータ構造について検討し、その統合化と将来的な各データフィールドの有機的結合へむけたキーワード辞書の基礎的条件の検討を継続した。

- (3) システム構築のための基礎的実験

写真資料、文献資料、テキストの各データフィールドの検索システム構築のための基礎作業を継続した。

写真資料については文字データは新規入力、及び入力済みデータの校正を継続中、画像データは JIF 規格による画像圧縮の実験をおこない、PC-9800 上での画像データベース実現の可能性をえた。文献資料については、所蔵図書、定期刊行物所載文献のデータベース作成を継続中、また両データベースの検索システムを試験的に運用している。テキストデータについては、新規入力（上記(1)―(2)）及び入力済みデータの処理（上記(2)―(1)）を継続した。また、稼働中の情報資料部・美術部 LAN の拡充をはかった。

2. 美術史における画像処理技術の応用に関する基礎的研究（5 年計画の第 3 年次）

美術史研究においては、作品に関する視覚情報が重要であり、高度なイメージ処理を可能とするシステムが必須である。一方、デジタル画像処理技術は実用段階をむかえ、美術史研究への本格的な応用が強く期待される。本研究の目的は、(1)デジタル画像処理による美術作品の分析方法、(2)画像データの蓄積に関わるデータベース・システム、を中心にすえている。本年度の研究内容は以下の通りである。

- 1) デジタル画像処理の応用については、古代金銅仏のガンマ線照射画像を例として解析を行った。側面・正面画像に擬似カラー処理を施し、画像上の濃度（透過度）と金銅仏の肉厚との対応を視覚的に明示した。撮影時のガンマ線の照射角等の問題があるが、今後のデータの蓄積によって、金銅仏の内部構造分析のための方法として活用することが期待できる。

調査研究

2) 画像関係のデータベース・システムに関しては、文部省科学研究費「有形文化財映像データベース」(代表者・東京国立博物館 高見沢明雄)に参加し、所蔵ガラス乾板(約2,000枚)をアナログ画像としてレーザーディスク化した。同時に、個々の画像に対応する文字データ作成を行って両者を統合し、文字による画像の検索を可能とした。

3) また、画像処理専用機(NEXUS 6800)で作成した高品位のデジタル画像を約20%に圧縮し、ローカル・ネットワークを介してパーソナルコンピュータ(PC-9801)のモニター上に表示する実験を行った。

3. 日本・東洋美術史文献データベースの開発(6年計画第4年次)

(1) 文献データの構造の検討

所蔵図書データと定期刊行物所載文献データの構造の検討を行い、文献の扱う美術各ジャンルに振り当てたジャンル・コードの改定を行った。

(2) データベースの作成

所蔵図書と定期刊行物所載文献データベースの作成を行った。所蔵図書については約2万9千件、定期刊行物所載文献については収集済みデータ約3万5千件のうち、1万件について校正を完了した。

(3) 文献データの共有化をめぐる諸問題の検討

オフラインによるデータ共有の方法(CD-ROMによるデータ配付やデータライブラリなど)の可能性について検討を行うとともに、データベースの出力による冊子体目録作成のための準備として、当研究所の刊行する『日本美術年鑑』収載の「定期刊行物所載文献・東洋古美術」を具体例として検討を行った。

4. 古代仏教彫刻研究

平安時代初期の菩薩形彫刻に見られる着衣表現の特色を、絵画・彫刻に共通する型であり、またその伝播媒体でもある「様」の介在を通して考察した。その成果は『美術研究』誌上に発表した。〈長岡〉

5. 鎌倉時代絵画史の研究

高僧伝絵の調査研究を継続した。本年は法然伝絵、一遍聖絵の調査を行うとともに、高僧伝絵成立の枠組みの基盤としての仏伝や、奇跡に関する材料としての中国僧伝、伝記の伝播者であると同時に改編増補者としての

聖などに焦点をあてた。その成果の一部は MINI-CONFERENCE ON READING SAINTS' LIVES EAST AND WEST において発表した。

肖像画の調査研究を継続した。本年は世俗人物の肖像画の調査を行うとともに、世俗人物肖像画の成立とその機能について研究をすすめた。また僧侶像について画像と伝絵の展開する場としての祖師忌や祖師講式の史料を検討した。＜米倉＞

6. 請来絵画研究

国内に伝来する大陸の仏教絵画について、1991年7月(長野・愛知地方)、1992年3月(長崎地方)の二度にわたる調査を行い、基本データと写真資料を収集した。また、12月の美術部・情報資料部公開講座において、成果の一部を公表した。主な調査作品は次のとおり。

長野・定勝寺……普陀山境図(元時代)、十八羅漢図(元時代)、

林子明筆釈迦三尊図(元時代)

愛知・中之坊寺…周四郎筆涅槃図(元時代)

長崎・最教寺……涅槃図(李朝時代)

長崎・春徳寺……涅槃図(清時代)

7. 中国絵画史研究

富岡鉄斎筆録の解説を継続し、中国絵画関係資料の調査を行った。中国天津市芸術博物館及び故宫博物院収蔵明清絵画の調査を行った。民国期絵画資料調査を継続した。＜鶴田＞

6. アジア文化財保存研究室

(1) 概要

文化財の保護について国際的に交流や協力をはかることは、先進国である我が国の重要な責務である。特にアジアにおいて我が国は大きな役割を果たさなければならない。国際協力を行うためには、まず各国の実状についての理解が必要で、そのための情報の収集が重要である。また、貴重な文化財を保存し修復するためには、人材を養成するための研修事業がきわめて重要である。さらに、文化財保存修復技術の向上のための研究を推進して行くこと

調査研究

も技術先進国である我が国の重要な責務である。以上のことから、文化財保護を目的とした情報、研修、研究の国際センターを我が国に設立すべきとの声が高まっている。

アジア文化財保存研究室は、センター設立に向けての第一歩として、平成2年10月に発足した。研究室ではアジアを中心に世界の文化財およびその保存に関する資料の収集、整理、データベースの作成を行っている。また、基礎研究として、屋外石造文化財の劣化の地質学的研究、および石材の強化保存処置に関する材料、処置方法の研究等を行っている。さらに、アジア文化財保存セミナーの企画、実行やアジアならびに諸外国の専門家の研修などに関わる仕事も積極的に進めている。

(2) 各 論

1. アジア諸国における文化財保存に関する情報の収集

(1) 文化財の劣化状態および保存対策についての調査

アジア文化財保存セミナーのアジア代表に、各国の最も代表的な文化財について、その保存状況と保存対策についてのアンケートを出し、多くの情報を得た。〈西浦〉

(2) 組織、機構、プロジェクト等についての調査

- 1) アジア文化財保存セミナーのアジア代表に、各国における文化財保存に関わる組織、機構、プロジェクト等についてその現状と問題点についてのアンケートを出し、多くの情報を得た。〈西浦〉
- 2) 東京国立文化財研究所を訪れたアジア諸国の文化財保存関係者から個別に各国の状況を聞き取り、資料とした。〈西浦、朽津〉
- 3) 国内で開かれたアジアの文化財の保存に関わる講演会、研究会などに積極的に参加し、資料の収集に努めた。また、海外では、ハワイで開かれたシンポジウム「アジア太平洋地域の熱帯環境下における文化財の保護」に出席し、多くの情報を得た。〈西浦、朽津〉

2. 屋外石造文化財の劣化と保存修復処置に関する研究

(1) 石材の劣化現象についての岩石学、鉱物学的調査研究

- 1) 神奈川県、重文・元箱根石仏の六道地藏と二十五菩薩の彫られてい

る部分の岩石サンプルを顕微鏡観察し、両者は同じ安山岩ではあるが岩質が異なることを明らかにした。〈朽津〉

- 2) プリヂストン美術館所蔵の大理石像「勝利の女神像」の劣化状態を岩石学的に分析した結果、表面層に特異な劣化現象が観察され、薬剤クリーニングによる影響が考察された。〈朽津〉

- 3) 新潟県立美術博物館蔵のロダン作の石像を岩石学的に分析した結果、石灰粒粉を用いた擬石であることがわかった。また、内部と表層部で粒状、色などが異なる材料が使われていることも判明した。〈朽津〉

(2) 石材の保存材料に関する調査研究

石材の強化および撥水处理に用いられる代表的なシリコン樹脂について、その物性を比較検討するための実験を行っている。凝灰岩、砂岩、安山岩試験片を用いた浸透性測定、石粒を用いた強化力評価実験が進行中であり、特に、ヨーロッパで広く用いられている変性エチルシリケート系強化剤である Wacker OH と日本で専ら用いられている SS-101 との比較を行っている。〈西浦〉

(3) 洞窟、磨崖仏などの劣化現象と保存対策に関する調査研究

- 1) 磨崖仏など石質遺跡の新しい保存方法として、岩体中に撥水性シリコン樹脂を注入含浸し、内部（背部）に撥水層を形成させて、地中水の浸入を防止する方法についての現場実験を福島県小高町の岩崖その他で行っており、施工上の問題点の検討および施工後の状態観察を行っている。（科研：一般研究B）〈西浦〉

- 2) 福島県小高町、史跡・薬師堂石仏の劣化状態を定期的に調査しており、大屋根架設後の岩体の乾燥に伴う状態変化について、保存処置法を踏まえつつ、調査を行った。〈西浦、朽津〉

- 3) 神奈川県、重文・元箱根石仏群の保存修復に関して、岩石の含浸強化処置、撥水処置についての現地調査を行い、また、樹脂の浸透性、撥水効果（地衣類防除効果）についての現地実験を行っている。〈西浦〉

- 4) 敦煌莫高窟における壁画剥落の大きな要因の一つである岩体からの

調査研究

塩類結晶析出物について、岩石鉱物学的に分析調査した結果、第194窟では食塩 (NaCl) が、第53窟では石膏 ($\text{CaSO}_4 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$) が主成分であることが判明した。〈朽津〉

5) イルクーツク州保存センターの依頼により、シベリアのレナ河上流域にあるシシュキノ岸壁画の保存についての調査を行い、基本的な保存方針・対策案を提出した。〈西浦〉

6) 敦煌莫高窟周辺の現地地質調査を行い、石窟が第四紀扇状地堆積物に作られていることが判った。〈朽津〉

3. その他

(1) 金属文化財の錆に関する鉱物学的研究

奈良県、薬師寺の金堂、講堂、東塔の表面に出ている錆を鉱物学的に分析し、アントラライト ($\text{Cu}_3\text{SO}_4(\text{OH})_4$)、プロカンタイト ($\text{Cu}_4\text{SO}_4(\text{OH})_6$) 等の悪性の錆を検出した。〈朽津〉

(2) 彩色建造物の保存修復に関する研究

社寺等の外部化粧としての丹塗塗装について、合成樹脂等種々の材料に依って、耐久性を改良する方法とその問題点を実験的に研究、考察するために、東京国立文化財研究所屋上と島根県日御碕神社において試験片の曝露試験を行っている。今までのところ丹を含まない合成樹脂塗料が抜群の耐久性を有していること、丹と合成樹脂を混合すると極端な変色など種々のトラブルが生じること、また、特にアクリル系の塗料ではプライマー処理の効果が大きいことなどの知見が得られている。〈西浦、川野辺、岡部〉

(3) 出土水浸木材の保存処理後の安定性に関する実験的研究

各種の保存処理を施した水浸木材試験片について、環境湿度変化に伴う重量、寸法の変化を、電子天秤、歪みゲージを用いたコンピュータ計測システムにより測定する実験を継続して行っている。今年度は特にPEG処理したものの挙動を中心に測定を行っている。〈西浦、今津〉

(4) 石材の産地推定など

1) 南関東の黒色緻密質安山岩製の石器について、岩石組成を偏光顕微鏡下で観察し、原石と比較することによって、原産地推定を行った。〈

朽津>

- 2) 高知県およびその周辺地域から出土した石器のうち、従来より岩石名が不明とされていたものについて、岩石組織の観察により、正確な岩石名を与えて分類を行った。<朽津>
- 3) 岡山県下の古墳の竪穴式石室に用いられている石材について、岩石組成に基づいて原産地推定を行い、一部は香川県から持ち込まれていることを明らかにした。また、同時代の香川県下の古墳石室石材を調べ、岡山県下のものと同様な石材が用いられている古墳があることを明らかにした。<朽津>
- 4) 佐賀県下の中・近世の窯跡について、側壁の結晶析出物にみられる累帯構造を偏光顕微鏡で観察することによって、窯の利用された回数 of 推定を行った。<朽津>

7. 国際調査研究

(1) 敦煌文化財保存修復に関する調査研究

1. 中国における研究

(1) 第1次訪中

平成3年5月7日～20日に下記の訪中団が敦煌を訪れ、日中共同での調査、研究、協議を行った。

馬淵久夫（保存科学部長）

三浦定俊（保存科学部物理研究室長）

西浦忠輝（アジア文化財保存研究室長）

朽津信明（アジア文化財保存研究室研究員）

北野 康（名古屋大学名誉教授）

- 1) 194(195)窟と53(469)窟に設置した温度、湿度、日照、外部風速、内部微風速計測システムからのデータの読み出しと初期解析。
- 2) 同じく積算日照計からのデータの読み出し。
- 3) 壁画劣化状態の実地調査と関連資料の調査。
- 4) 194窟と53窟からの岩石および下地（土壁）サンプルの採取。

調査研究

- 5) 当面の研究の進め方および人物交流についての協議。

(2) 第2次訪中

平成3年10月17日～30日に下記の訪中団が敦煌を訪れ、日中共同での調査、研究、協議を行った。

西川杏太郎（所長）

三輪 嘉六（修復技術部長）

三浦 定俊（保存科学部物理研究室長）

朽津 信明（アジア文化財保存研究室研究員）

大堀 岳満（庶務課庶務係長）

三原 醇悟（文化庁伝統文化課普及助成室長）

和田 勝彦（文化庁記念物課記念物行政企画官）

勝木言一郎（東京芸術大学大学院美術研究科院生）

- 1) 194(195)窟と53(469)窟に設置した温度、湿度、日照、外部風速、内部微風速計測システムからのデータの読み出しと初期解析。
- 2) 同じく積算日照計からのデータの読み出し。
- 3) 壁画劣化状態の実地調査と関連資料の調査。
- 4) 194窟と53窟の相対位置の測量。
- 5) 194窟と53窟からの顔料、下塗（漆喰）、補修時のモルタル、析出物（塩類）のサンプルの採取。
- 6) 榆林窟の劣化状態調査
- 7) 当面の研究の進め方および人物交流についての協議。

(3) 第3次訪中

平成4年2月22日～3月3日の11日間、下記の4名が訪中し、関連調査および資料の収集を行った。

馬淵 久夫（保存科学部長）

井手誠之輔（情報資料部文献資料研究室研究員）

佐野 千絵（保存科学部物理研究室研究員）

朽津 信明（アジア文化財保存研究室研究員）

2. 日本における研究協議または研修

- (1) 平成3年12月20日～平成4年2月17日（3月7日）

段修業（敦煌研究院保護研究所助理研究員），李軍（同，助理館員）

目的：X線回折，走査型電子顕微鏡等による敦煌莫高窟壁画顔料の分析研究および機器分析一般の研修

(2) 平成3年12月20日～平成4年3月7日

王宝義（敦煌研究院保護研究所助理研究員）

目的：コンピュータによる環境機器計測に関する研修

3. 第6回敦煌莫高窟壁画保存修復協力会議

平成3年3月9日，協力会議委員，文化庁関係者，東文研関係者が出席して東文研において開催され，下記の議題について討議した。

- a. 第6回敦煌莫高窟壁画保存修復協力会議議事録（案）について。
- b. 平成3年度研究結果および今後の方向について。
- c. 平成4年度研究計画（案）について。

(2) 米国スミソニアン研究機構との共同研究

平成元年度から始まった科学研究費による共同研究の最終年度に当たる。3年度はアメリカ側から，パメラ・バンディパー，トム・チェイスが来日し，縄文土器，青銅試料についての共同研究を日本側研究者と行った。またスミソニアン費用により中国社会科学院世界宗教研究所の金正耀氏が来日し，中国の青銅器の鉛同位体比分析を行っている（約80点測定済み）。日本からは，沢田正昭，西村康（以上奈良国立文化財研究所），戸津圭之介（東京芸術大学），馬淵久夫，平尾良光が渡米し，共同研究を行った。

(3) 海外所在日本美術品調査

当研究所では，昭和63年以来，欧米所在の明治時代以前の日本美術作品に関する基礎データの収集に努めてきた。平成2年度より，古文化財科学研究会が日本芸術文化振興会から助成金を得て「海外所在の日本文化財を対象とする調査研究」を行うこととなり，当研究所がその委嘱を受けて調査研究を担当した。平成2年度はメトロポリタン美術館，3年度はパーク・コレクション，パーク・ファウンデーションが所有する作品の調査を行い，その成果として，「海外所在日本美術調査報告」2冊を刊行した。

8. 主要研究業績

- ①：著書・編書 ②：論文 ③：解説 ④：研究発表
⑤：講演・放送 ⑥：その他 平成3.4～平成4.3

所 長

西川杏太郎

②塑像技法の伝来—日本初期仏教彫刻の場合—

- | | | |
|---------------|----------------------|------|
| | 龍谷大学350周年記念『仏教東漸』 | 3. 4 |
| ②鎌倉仏教と仏像の歴史 | 『仏教美術入門』5 平凡社 | 3. 7 |
| ②正倉院の伎楽面 | 『正倉院宝物にみる楽舞・遊戯具』 紫紅社 | 3. 8 |
| ③法隆寺の聖徳太子彫像 | 『聖徳』128 法隆寺 | 3. 4 |
| ③仏像の制作技法 | 『仏教美術入門』6 平凡社 | 4. 1 |
| ⑤博物館における公開と保存 | 第2回アジア文化財保存セミナー | 3.11 |

美 術 部

井上一穂（主任研究官）

②奈良時代の“如意輪”観音信仰とその造形—石山寺像を中心に—

- | | | |
|-------|-------------|------|
| | 『美術研究』353 | 4. 3 |
| ③作品解説 | 『運慶と快慶』 講談社 | 3. 8 |

佐藤道信（主任研究官）

- | | | |
|---------------------|-------------------------|------|
| ②狩野派の終焉 | 『明治日本画史料』 中央公論美術出版 | 3. 4 |
| ②展覧会芸術について「江戸から明治へ」 | 『日本美術全集』21 講談社 | 3. 4 |
| ②画塾から美術学校へ | | |
| | 「天心傘下の巨匠たち」展図録 飯田市美術博物館 | 3.10 |
| ②日本画画壇の再編成と明治宮殿 | 「明治宮殿の杉戸絵」展図録 | |
| | 博物館明治村 | 3.10 |
| ②南北合派と明治日本画旧派 | 「大庭学僊と明治前期日本画」展図録 | |
| | 下関市立美術館 | 3.11 |

主要研究業績

- ②北斎・暁斎の雅号と世界観 「暁斎」 45 3.11
- ②絵画と言語(1) 「画」と漢字 「美術研究」 353 4. 3
- ③作品解説 「江戸から明治へ」『日本美術全集』21 講談社 3. 4
- ③「龍池会報告」解説 『近代美術叢書5』 別冊 ゆまに書房 3. 6
- ③作品解説 『御物 絵画Ⅲ』(皇室の至宝 Ⅲ) 毎日新聞社 3. 7
- ③作品解説 下村観山 「鶴」 「国華」 1150 3. 9
- ③近現代美術(日本)の研究について<美術研究と参考図書>
「アート・ドキュメンテーション通信」 11 3.10
- ③コラム「伯林日本画展覧会」
『ベルリン美術館』(『秘宝日本美術大観』7) 講談社 4. 2
- ③作品解説 『御物 障・調度Ⅱ』(皇室の至宝 Ⅶ) 毎日新聞社 4. 3
- ③現代へつながる“近代化の指針” 『日本美術』復刊紹介 雄松堂 4. 3
- ④北斎・暁斎の雅号と世界観 河鍋暁斎第2回シンポジウム 3. 4
- ⑤明治の美術2, 3(日本画) 横須賀市市民大学講座 3. 7
- ⑤明治前期日本画の諸相 下関市立美術館 3.11

三宅久夫(第一研究室長)

- ②快慶と来迎阿弥陀三尊像 『運慶と快慶』 講談社 3. 8
- ③快慶作光台院阿弥陀三尊像 「美術研究」 351 4. 3
- ③作品解説「浄土寺阿弥陀三尊像」他 『運慶と快慶』 講談社 3. 8
- ④多彩な来迎の造形 美術部・情報資料部公開学術講座 3.12.7

島尾新(第一研究室)

- ①『日本美術史』(共著) 美術出版社 4.10
- ②雪舟等楊の研究(一) — 雪舟のイメージ戦略 — 「美術研究」 351 4. 1
- ④雪舟と水墨画 福岡市立美術館 3.8.10
- ④“かたち”と“ことば” 「かたちの情報学」研究会
国立歴史民俗博物館 3.11.2
- ④海外所在日本絵画・彫刻のデータベース
「かたちの情報学」研究会 国立歴史民俗博物館 4.3. 9

調査研究

⑥1990年の歴史学会—回顧と展望—(中世・美術史)

「史学雑誌」第100編5号 3.5

三輪英夫(第二研究室長)

②写実の変容—洋風画から洋画へ

「江戸から明治へ」『日本美術全集』21 講談社 3.4

③御物を通して見る近代日本絵画—洋画

『御物 皇室の至宝III』毎日新聞社 3.7

③黒田清輝「湖畔」

「国華」1150号 3.9

③岡田三郎助の芸術

『アサヒグラフ別冊・岡田三郎助』日本編69 3.11

③作品解説 百武兼行他

『洋画の遺産』マリア書房 4.3

⑤明治前期の洋画

新潟県美術館美術講座 3.9.15

⑤日本近代洋画の展開

長岡市中央図書館 3.11.17

⑤黒田清輝と日本近代洋画

平塚市美術土曜講座 4.3.14

山梨絵美子(第二研究室)

③作品解説(高橋由一「鮭」他11点)

『日本美術全集』21 講談社 3.4

③作品解説(高橋由一「明治天皇御肖像」他4点)

『御物 皇室の至宝III』毎日新聞社 3.7

③作品解説(高村光雲「倭鶏」他6点)

『御物 皇室の至宝IV』毎日新聞社 3.9

③作品解説 高橋由一「花魁」

「国華」1150号 3.9

③作家解説 森田元子他

『洋画の遺産』マリア書房 4.3

③黒田清輝 其日のはて(一)(二)

「美術研究」353 4.3

④コンポジションから構想画へ

—黒田清輝による農耕主題の作品を中心に

国際美術史学会 3.9.19

⑤高橋由一と初期洋画

川崎市幸区美術講座 3.10.1

⑤黒田清輝と白馬会

川崎市幸区美術講座 3.10.29

⑤江戸幕府による洋画研究

横浜市民ギャラリー美術講座 3.11.2

⑤洋画家黒田清輝の虚像

横浜市民ギャラリー美術講座 3.11.16

主要研究業績

- ⑤日本近代洋画史 — 黒田清輝を中心に 船橋市八木が谷公民館 3.11.21
- ⑤兄島善三郎と新日本主義 横浜市民ギャラリー美術講座 4.3.14
- ⑤エコール・ド・パリに咲いた日本洋画 横浜市民ギャラリー美術講座 4.3.21
- ⑥翻訳 ヘンリー・スミス著
「広重と清親の名所図における十九世紀の視覚」
『日本美術全集』21 講談社 3. 4
- ⑥翻訳 ドナルド・マッカラム著「円空 その修験道と想像力」
『日本美術全集』16 講談社 3.10
- ⑥共訳 ビーター・ガラシ著「写真以前」 「美術手帖」645-647 3.10-12

芸 能 部

佐藤 道子 (芸能部長)

- ②悔過会と牛王宝印 町田市立博物館図録第8集 3.11
- ②悔過法要の形式 — 成立と展開 — その二 「芸能の科学」19 3.12
- ③「能の伝承と再生」 月刊文化財 NO.337(10月号) 3.10
- ③法華八講について 国立能楽堂上演資料集 <3> 3.12
- ④仏教年中行事関係資料について 三宝絵研究会 3. 3
- ④悔過会の教化 (一) 顕密仏教研究会 3. 5
- ④三宝絵詞 — 修正会 — 三宝絵研究会 3. 7
- ④悔過会の教化 (二) 顕密仏教研究会 3. 7
- ④祈年の伝統行事にみる呪術性 第3回中国芸術祭シンポジウム 4. 2
- ⑤悔過会と仏教行事 — 法華綴法を中心に — 仏教文学大会 3. 6
- ⑤悔過会と牛王宝印 町田市立博物館 3.11
- ⑤法隆寺の年中行事 法隆寺文化講演会 3.12
- ⑤悔過会と「三十二相」 東京国立文化財研究所芸能部公開学術講座 3.12.20

鎌倉 恵子 (主任研究官)

- ①「勢相撲番組」(翻刻 解題) 「歌舞伎台帳集成」第25巻 勉誠社 3. 5
- ①歌舞伎評判記集成第二期(翻刻 共同) 第十巻 岩波書店 4. 2
- ②絵入浄瑠璃本挿絵試考 「論集近世文学」1 勉誠社 3. 5

調査研究

- ②絵入狂言本挿絵試考—近松作元禄十二年まで— 「芸能の科学」 20 4. 3
④絵画資料による近世演劇研究 芸能部夏期学術講座 3. 7
⑥国語国文学会の展望(II) 近世(演劇) 「文学・語学」第132号 3.12

羽田 颯(演劇研究室長)

- ②〔資料紹介〕明治期桜間家文書二点 「芸能の科学」 19 3.12
④能における「演出」をめぐる
第15回国際研究集会「能の伝承と再生」 3.10.31
⑤「井筒」の演出について 大槻能楽堂 3.12.21
⑥狂言「政頼」台本研究 国立能楽堂狂言公演 3.6.30
⑥復曲能「当願暮頭」演出 国立能楽堂研究公演 3.12.23~24

高橋 美都(演劇研究室)

- ②鎌倉・南北朝時代の「声明集」にみる記譜の諸相 「芸能の科学」 19 3.12
③「東大寺修二会」音と映像による日本古典大系 映像解説編 平凡社 4. 3
⑤「大懺悔」と「三十二相」の特質と展開
東京国立文化財研究所芸能部公開学術講座 3.12.20

蒲生 郷昭(音楽舞踊研究室長)

- ①音と映像による日本古典芸能大系(岸辺成雄ほか4名との共同監修)
日本ビクター 3.6(映像), 4.3(映像解説編)
②長唄正本研究104~115(共同研究) 「邦楽と舞踊」490~501 3.4~4.3
②日本の音楽理論における「中」について 「芸能の科学」 20 4. 3
③天王寺の楽人 第24回佐野萌演能会パンフレット 3. 4
③「艶容女舞衣」酒屋の段, 義太夫節「野崎村—新版歌祭文 上の巻」,
「長唄紀州道成寺」
音と映像による日本古典芸能大系 映像解説編 日本ビクター 4. 3
④平曲に関する音楽用語について——曲節名をめぐる——
第12, 13回平家琵琶研究会 3.4.19, 7.12
④能楽が近世芸能に及ぼした影響について——音楽面を中心に——

第15回国際研究集会「能の伝承と再生」 3.10.29

⑥田辺尚雄賞と国際シンポジウム（対談）

能楽タイムズ第472号 3. 7

丸茂美恵子（音楽舞踊研究室）

②日本舞踊における娘形作品の技法研究（23～26）

「季刊 舞踊研究」57～60 3.6～4.3

②歌舞伎の色彩—赤の魅力—

「芸能」392 3.10

②舞踊「八段目（下の巻）」—その成立・伝承・影響—

「芸能の科学」20 4. 3

③舞踊の衣裳

『日本舞踊鑑賞入門』II 3. 4

③舞踊の小道具

『日本舞踊鑑賞入門』II 3. 4

③「安宅の松」ほか15曲

『現代実用 日本舞踊曲全集』花の巻 上・下 3.11, 4. 3

③「連獅子」ほか66曲

舞踊華扇会・春の会プログラム 3. 5

③「名寄の寿」ほか16曲

関西舞踊華扇会プログラム 3. 5

③松本作品十作—鑑賞の栗—

松本亀松追善舞踊会プログラム 3. 6

③「玉兎」ほか69曲

舞踊華扇会プログラム 3. 8

③「吼嚙」と釣狐物の系譜

若柳寿延リサイクルプログラム 3.10

③「藤娘」ほか4曲

「至芸 伝統のきわみ」プログラム 3.10

③春秋の月（浅妻船・玉兎）

扇生の会プログラム 3.10

⑤報告「小寺融吉の舞踊研究」

舞踊学会 3. 5

⑥国史大辞典 第12・13巻（流派・人名項目）

吉川弘文館 3.6, 4.3

⑥舞踊美を織る（60～71）

「邦楽と舞踊」490～501 3.4～4.3

⑥至芸 伝統のきわみ（共同構成）

テレビ東京 4. 1

⑥報告「小寺融吉の舞踊研究」

「舞踊学」14 4. 1

中村 茂子（民俗芸能研究室長）

②芸能と扇の関係

「芸能の科学」19 3.12

②民俗芸能に見る延年の諸相

「芸能の科学」20 4. 3

調査研究

- ③民俗芸能と「ささら」 「民俗芸能 in としま」 3. 8
 ③「鉢叩」と現行空也踊躍念仏 第3回「槌の会」 3.12
 ③太鼓踊とシシ踊 国立劇場第64回民俗芸能公演 3. 9
 ④多摩の民族芸能 実践女子大学シンポジウム多摩の地域文化 3.10.5
 ④寒川神社「田打舞」の復活について 総合研究会 3.10

三村 昌義 (民俗芸能研究室)

- ②落語における忠臣蔵の受容 「芸能の科学」 19 3. 1
 ⑥連続講座「太平記を読む」 滑川市民講座 3.5~12

保存科学部

馬淵久夫 (保存科学部長)

- ②島根県荒神谷遺跡出土銅剣・銅鐔・銅矛の化学的調査
 — 非破壊分析と鉛同位体比測定 —
 (江本・門倉・平尾・青木・三輪と共著) 「保存化学」 30 3. 8
 ②平原弥生古墳出土銅鏡およびガラスの鉛同位体比 (平尾・西田と共著)
 原田大六著「平原弥生古墳」上巻 3.11
 ③アジア文化財保存セミナーを終えて 「月刊文化財」 331 3. 4
 ③Book reviews: E.V.Sayar et al. 'Materials Issues in Art and
 Archaeology', Materials Research Society
 Publications, Pittsburgh "Studies in Conservation" 36, 3. 5
 ③弥生時代と青銅の渡来 「九州歴史大学講座 — 古代合衆国・九州」 3.11
 ③鉛同位体比による青銅の産地 (斎藤努と共著)
 「科学の目でみる文化財」国立歴史民俗博物館 4. 3
 ④Multi-instrumental Study of Photochemical Degradation of Silk
 (佐野, 三浦, 川野邊と共同)
 The 13th Symposium on Remote Sensing
 for Environmental Sciences 3.8.26
 ⑤弥生時代と青銅の渡来
 第7回九州歴史大学講座「古代のハイテク技術」 3. 3.9

門倉武夫（主任研究官）

- ②島根県荒神谷遺跡出土銅剣・銅鐸・銅矛の化学的調査 — 非破壊分析と鉛同位体
比測定 — (馬淵・江本・平尾・青木・三輪と共著) 「保存科学」 30 3. 8
- ②文化財環境と汚染因子の挙動 「環境技術」 20,8, 3. 8
- ②NO₂, SO₂ガスによる天然繊維の劣化と天然染料染色布の変褪退色
(斉藤・芳住・柏木と共著) 「古文化財の科学」 36 4. 3
- ②文化財と大気腐食 日本材料学会腐食暴食部門委員会資料 13 3. 1
- ②建築装飾金具の耐久性の研究 (青木・斎藤・鈴木・木下と共著)
「保存科学」 31 4. 3
- ③大気汚染から文化財を守る — 文化財と環境 —
「化学と教育」 40,1,26~29 4. 1
- ③文化財と大気汚染 「産業公害」 28 4. 1
- ③遺跡保存と公害による影響 「地理・歴史」 帝国書院 62 4. 2
- ④文化財保存環境に於ける汚染因子の挙動
日本文化財科学会第8回大会（特別ポスターセッション） 3.5.25
- ④染色布の変褪退色に対する文化財保存環境中のNO₂, SO₂の影響
(斉藤・芳住・柏木と共同) 古文化財科学研究会第13回公演会大会 3.6.1
- ⑤文化財とそれを取りまく環境 わたしたちの文化財と環境フォーラム 3.11
- ⑤大気汚染から文化財を守る — 文化財と環境 — 「化学と教育」講演会 4.3.25

石川陸郎（主任研究官）

- ③新しい美術館・博物館館内環境づくり 1) 建築環境について
建築通信新聞 3.11.12
- ③新しい美術館・博物館館内環境づくり 2) 保存展示環境について
建築通信新聞 3.11.19
- ③新しい美術館・博物館館内環境づくり 3) 博物館美術館の照明と空調
建築通信新聞 3.11.26
- ④新設美術館の諸問題 平成3年度文化財保存修復研究協議会 3.9.27
- ⑤文化財の保存
指定文化財（美術工芸品）展示取扱講習会 東日本ブロック 3.7.16

調査研究

- ⑤博物館にみる展示環境 関西博物館連盟 3.9.12
⑤科学写真撮影の実際 指定文化財（美術工芸品）修理技術者講習会 3.11.6
⑤文化財の保存
指定文化財（美術工芸品）展示取扱講習会 西日本ブロック 3.12.3

平尾良光（化学研究室長）

- ②福島県「月の輪山1号墳」から出土した頭椎大刀柄頭の科学的調査
（竹中、榎本と共著） 福島市振興公社「文化財調査室年報1」 3.6
②平原弥生古墳出土青銅鏡およびガラスの鉛同位体比（馬淵、西田と共著）
「平原弥生古墳」上巻／原田大六著；
平原弥生古墳調査報告書編集委員会編 3.11
②島根県荒神谷遺跡出土銅剣・銅鐔・銅矛の化学的調査—非破壊分析と
鉛同位体比測定（馬淵、江本、門倉、青木、三輪と共著）
「保存科学」30 3.8
②機器中性子放射化分析による銅及び青銅器遺物中の多元素定量（鈴木、
平井と共著） 「考古学と自然科学」24 3.6
②滝峰才四郎谷銅鐔の埋蔵環境の科学的調査（前田、佐々と共著）
「滝峰才四郎谷遺跡発掘調査報告書」／細江町教育委員会 3.9
②東京国立博物館法隆寺献納宝物 鉄製鎌および鋸の蛍光X線分析法
による化学組成の調査 「MUSEUM」485 3.9
②本村籠遺跡から出土した青銅製品の鉛同位体比（榎本と共著）
「考古学雑誌」77 4.1
②今宿五郎江遺跡出土小銅鐔の鉛同位体比について（馬淵と共著）
「福岡市今宿五郎江遺跡II」；福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集 3.3
②福島県「月の輪山1号墳」から出土した頭椎大刀柄頭の科学的調査
（竹中、榎本） 福島市振興公社「文化財調査室年報1」 3.6
③シルクロードとトルコ文明、 絲之路 8 4.1
③Q&A 蒸留水とは、 「ぶんせき」207 4.3
⑤鉛同位体比から見たカマンーカレホック遺跡出土銅製品—1990年資料—
（榎本と共同） 中近東文化センター2月セミナー 4.2.22

三浦定俊（物理研究室長）

- ① 絵画の保存と展示「フレッシュを化学する」
「一億人の化学シリーズ2」 日本化学会編 3. 9
- ① 鳳凰堂絵画の光学的調査「平等院大観 第3巻絵画」 岩波書店 4. 1
- ② 光画像計測法を用いた古美術品の研究
「秋山光和博士古希記念論文集」 論文集刊行会編, 便利堂 3. 7
- ② 「アルカリ」因子についての再考（佐野と共同） 「保存科学」 30 3. 8
- ② 数理美術史学への誘い 「MUSEUM」 288 3.11
- ② 顔料からの光電子放出を利用したX線撮影法による壁画技法の研究
「計測自動制御学会論文集」 28 4. 1
- ② Image processing of x-ray photographs by one-dimensional
analog spatial differential treatment（大橋と共同）
Analysis and Examination of an Art Object
by Imaging Technique
同第12回国際シンポジウム報告書 4.3
- ② X線透視撮影を利用した金属製品の厚みの推定
国立歴史民俗博物館研究報告 38 4. 3
- ② 敦煌莫高窟の気象（西浦，張，王と共同） 「保存科学」 31 4. 3
- ② 塗漆建造物黒下現象と微生物の関連性について，彩色の糸状菌防除対
策の検討，建造物の生物被害調査
（国宝・重要文化財日光社寺建造物の保存に関する研究）
（新井・見城・中里・森・江本・伊藤と共同） 「保存科学」 30 3. 8
- ③ いかに保存したらよいかー保存の考え方と原理 月刊住 12 3. 5
- ③ 石像の非破壊検査 プラントエンジニア 23 3. 8
- ④ 史跡薬師堂石仏の覆屋改修工事の成果と課題
第13回古文化財科学研究会大会 3. 6
- ④ Multi-instrumental Study of Photochemical Degradation of Silk
（佐野，川野邊，馬淵と共同）
The 13th Symposium on Remote Sensing
for Environmental Sciences 3. 8.26

調査研究

⑤古墳・洞窟の保存環境

平成3年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修

奈良国立文化財研究所 3.11.7

⑤文化財の保存と環境

平成3年度指定文化財修理技術者講習会, 文化庁 3.11.8

⑥ IIC-Japan いよいよスタート 古文化財の科学通信 42 3.10

⑥ Activity of the Casting Technology Group 「東アジア地域の
古文化財(青銅器および土器・陶磁器)の保存科学的研究」

国際学術研究研究成果報告書 4. 3

佐野千絵(物理研究室)

②「アルカリ因子」についての再考(三浦と共著) 「保存科学」 30 3. 8

② Photochemical Reactions of Tetramethylstannane Isolated in
Low Temperature Argon Matrix,

J. Radioanal. Nucl. Chem., Letters 164(6) 4. 2

⑥ テクノフォーラム「漆の科学・技術・匠」に参加して

古文化財の科学通信 44 4. 3

④ Multi-instrumental Study of Photochemical Degradation of Silk
(三浦・川野邊・馬淵と共同)

The 13th Symposium on Remote Sensing
for Environmental Science 3.8.26

新井英夫(生物研究室)

① A Closed System for Preventing Fungal Growth in Cultural
Properties, "Biodeterioration of Cultural Property (Proceedings
of the International Conference, February 20-25, 1989,
Lucknow, India)" (見城と共同) Macmillan India Limited 3. 4

① 文化財の微生物による被害と対策,

「文化財の虫菌害防除概説」(分担執筆) (財)文化財虫害研究所 3.12

① 有用糸状菌の分類学的研究, 「飯塚廣教授研究業績集」(分担執筆)

主要研究業績

- 東京大学出版会 4. 3
- ②塗漆建造物黒下現象と微生物の関連性について、彩色の糸状菌防除対策の検討、建造物の生物被害調査
(国宝・重要文化財日光社寺建造物の保存に関する研究)
(見城、中里、三浦、森、江本、伊藤と共同) 「保存科学」 30 3. 8
- ③Deterioration of stone by Organisms, "On-site Training of Kampuchian Students in the Conservation of the Angkor Monuments"
上智大学アンコール調査団 3. 4
- ③文化財に見る生物劣化(写真集)
第2回国際文化財生物劣化会議組織委員会 4. 2
- ⑤文化財のカビ害と防除対策 (財)文化財虫害研究所 3. 6
- ⑤文化財の保存(劣化I)
平成3年度指定文化財展示取扱講習会 3. 7
- ⑤文化財の生物被害 韓国文化財研究所 3. 9
- ⑤殺菌燻蒸と燻蒸剤の安全使用について (財)文化財虫害研究所 3.10
- ⑤文化財の生物被害と除去
平成3年度指定文化財修理技術者講習会 3.11
- ⑤微生物による文化財の被害と防除、文化財の殺菌燻蒸
(財)文化財虫害研究所 4. 1
- ⑥文化財の保存と生物学、(わが仕事、わが職場)
「SUT BULLETIN」 3. 4
- ⑥インド国立文化財研究所およびインド保存科学研究所の活動と今後の保存科学の展望(O.P.Agrawal氏の講演)
「古文化財の科学通信」 42 3.10
- ⑥第9回国際博物館会議保存科学部会への出席
「鹿島美術財団年報(平成2年度版)」 8 3.12

山野勝次(生物研究室)

- ①害虫とカビから住いを守る—その基礎知識と建築的工夫—(共著)
彰国社 3.12

調査研究

- ①文化財の虫菌害防除概説（共著）（財）文化財虫害研究所 3.12
- ②水ガラスによる防蟻処理（第1報）
 - イエシロアリに対する室内効力試験 — 「しろあり」 85 3.7
- ②金属溶射被膜による防蟻処理（第4報）— 金属溶射被膜の防カビ性
 に関する室内実験 — 「家屋害虫」 13 3.7
- ②福山市で発見されたアメリカカンザイシロアリについて
 「しろあり」 86 3.10
- ③イエシロアリによる屋根裏の被害（座談会司会・まとめ）
 「しろあり」 84 3.4
- ③シロアリと原生動物 新建築学体系・月報（35） 43 3.9
- ③燻蒸施工見積書について 「文化財の虫菌害」 22 3.12
- ⑤シロアリの被害と対策 日本建築学会木造建築研究フォーラム 3.5.13
- ⑤くらべてみれば — シロアリ VS マイホーム — NHK 総合テレビ 3.5.27
- ⑤文化財の害虫と防除対策
 - 第13回文化財虫菌害保存対策研修会 （財）文化財虫害研究所 3.6.30
- ⑤シロアリの生態に関する実務的知識（平成3年度しろあり防除施工士資格第2
 次指定講習会）（社）日本しろあり対策協会 3.9.11
- ⑤文化財虫菌害燻蒸処理標準仕様書ならびに危険防止措置規定について
 （第11回文化財虫菌害燻蒸処理実務講習会）（財）文化財虫害研究所 3.10.7
- ⑤昆虫学の基礎知識，昆虫による文化財の被害と防除，文化財の殺虫燻蒸
 （第13回文化財虫菌害防除作業主任者の能力認定試験とその講習会）
 （財）文化財虫害研究所 4.1
- ⑤シロアリの生態と被害（平成4年度しろあり防除施工士資格第1次指定講習会）
 （社）日本しろあり対策協会 4.1

修復技術部

三輪嘉六（修復技術部長）

- ①『日本馬具大鑑』2，3（古代上，下）（編著） 吉川弘文館 3.12
- ②文化財保護の歩み 『歴史読本』歴史博物館総覧 4.2
- ⑤埋蔵文化財の保護行政について 国立台湾史前史博物館 3.6

川野邊 渉 (主任研究官)

- ①古建築の外装塗装の物性に関する研究 (Ⅱ) (西浦らと共著)
「保存科学」31 4. 3
- ②住居跡の磁気探査に関する一考察 (亀井らと共著)
「考古学と自然科学」—日本文化財科学会誌— 3. 5
- ⑤文化財の耐候性 高分子素材センターセミナー 3.10
- ⑤接着の科学 指定文化財修理技術者講習会 3.11

中里壽克 (第1修復技術研究室長)

- ②平安時代の漆芸技法 上 「漆文化」63日本文化財漆協会誌 3. 7
平安時代の漆芸技法 下 「漆文化」64日本文化財漆協会誌 3.11
- ③「曼荼羅と来迎図」作品解説 『日本美術全集』7 講談社 3. 6
- ③変る我が国の文化財修復 朝日新聞夕刊 4. 2
- ④平安時代の工芸 漆フォーラム 石川県工業試験場 3.11
- ⑤保存科学 文化財建造物修理主任技術者講習会 3. 9
- ⑤平安時代の蒔絵 会津短期大学公開講座 3.10
- ⑤文様 会津工業試験所公開講座 3.10
- ⑤日本漆芸技法の流れ
奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研修 3.12

増田勝彦 (第2修復技術研究室長)

- ①水害を受けた図書・文書の真空凍結乾燥—和紙を綴じた図書—
保存科学, 31 4. 3
- ⑤図書館・美術館の資料としての紙
第13回文化財の虫菌害対策研修会 文化財虫害研究所 3. 6
- ⑤史料の保存科学 史料管理学研修 国立史料館 3. 7
- ⑤紙製文化財の修復 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修 3. 7
- ⑤史料の保存科学 文書資料取扱講習会 埼玉県文書館研修会 4. 2
- ⑤文化財と紙 神奈川大学公開セミナー 4. 3

調査研究

青木繁夫（第3修復技術研究室長）

- ①酸性雨による銅板屋根腐食の一事例（松田らと共著）
「協会通信」51号文化財建造物保存技術協会 3.11
- ①建築装飾金具の耐久性の研究（門倉らと共著） 「保存科学」,31 4.3
- ⑤遺跡・遺構の保存について 国立台湾史前史博物館 3.6
- ⑤修復材料の選択第13回文化財の虫菌害対策研修会 文化財虫害研究所 3.6
- ⑤考古学における科学的な修理 神奈川県埋蔵文化財センター研修 3.6
- ⑤文化財修理と合成樹脂 指定文化財（美術工芸品）修理技術者講習会 3.11

情報資料部

鶴田 武良（情報資料部長）

- ①『鉄斎筆録集成』 第一巻 便利堂 3.11
- ②鉄斎—その文人指向（「富岡鉄斎」） 京都新聞社 3.4
- ②原田悟郎氏聞書「大正—昭和初期における中国画コレクションの成立」
「中国明清名画展図録」 日中友好会館美術館 4.2
- ③美術 「中国年鑑1991年版」 中国研究所 3.6
- ③作家略歴・83名 「中国明清名画展図録」 日中友好会館美術館 4.2
- ③近百年來中国絵画史研究2・附1 第2次全国美術展覧会作品目録
「美術研究」251 4.1
- ③近百年來中国絵画史研究2・附2 第3次全国美術展覧会作品目録
「美術研究」252 4.2
- ④台湾地区の美術運動 所内総合研究会 3.4
- ⑥目に触れるもの、みな珠玉—天津市芸術博物館紹介—（翻訳）
「中国明清名画展図録」 日中友好会館美術館 4.2

米倉 迪夫（文献資料研究室長）

- ③国立歴史民俗博物館所蔵「うたたね草紙」 「美術研究」 352 4.2
- ④The Miraculous Lives of the Japanese Buddhist Saint: some examples from the illustrated biography of Honen, A MINI-CONFERENCE ON READING SAINTS' LIVES EAST AND WEST(FIVE

COLLEGE MEDIEVAL STUDIES SEMINAR AND THE HAM-
LTON FUND OF AMHERST COLLEGE) 3.12

- ⑥前言—美術史研究の基礎資料の共有化とデータベースの活用—
美術史研究の基礎資料の共有化とデータベースの活用
(科学研究費成果報告書) 4. 3
- ⑥梅津次郎氏撮影作品リスト、美術史研究の基礎資料の共有化とデータ
ベースの活用 (科学研究費成果報告書) 4. 3

井手誠之輔 (文献資料研究室)

- ②杭州をめぐる仏教絵画—宋時代江南における仏教絵画と東アジア地域
への波及— 「鹿島美術財団年報」第8号 3.12
- ③『日本美術全集7 曼荼羅と来迎図』解説3点 講談社 3. 6
- ③『日本の仏像大百科5 習合神・高僧』解説13点 ぎょうせい 3. 7
- ④中国寧波地方の仏教絵画 美術部・情報資料部公開講座 3.12.7

鈴木 廣之 (写真資料研究室長)

- ②16・7世紀日本絵画における古典の継承 「鹿島美術財団年報」8 3. 5
- ②絵の価値・絵の見方—室町時代相国寺松泉軒の障子絵制作から—
「美術研究」352 4. 2
- ②パブリック・ラブラリィの提言—個人・グループ作成データの相互利
用のために—
科学研究費総合A「美術史研究における基礎資料の共有化とデータ
ベースの活用」研究成果報告書(研究代表者・米倉迪夫) 4. 3
- ③〈小特集・2〉美術研究と参考図書：参考図書の現状—江戸時代以前
の日本美術史の場合— 「アート・ドキュメンテーション通信」11 3.10
- ④相国寺松泉軒の障子絵制作をめぐる 美術部・情報資料部研究会 3.12
- ④瀟湘八景を読む 第44回東京読画連 4. 2

長岡 龍作 (写真資料研究室)

- ②仏像表現における「型」とその伝播—平安初期菩薩形彫刻に関する

調査研究

- 一考察—(上) 「美術研究」 351 4. 1
- ②仏像表現における「型」とその伝播—平安初期菩薩形彫刻に関する
一考察—(下) 「美術研究」 352 4. 2
- ③作品解説 日本美術全集10 「運慶と快慶」 講談社 3. 8

アジア文化財保存研究室

西 浦 忠 輝 (アジア文化財保存研究室長)

- ①石質遺跡の新しい保存技術の開発に関する研究
科学研究費一般研究 (B) 研究成果報告書 4. 3
- ②Experimental Study on the Dimensional Change of Highly Decayed Waterlogged Wood According to Ambient Humidity After Preservation Treatment (今津と共著)
Proceedings of the 4th ICOM-Group on Wet Organic Archaeological Materials Conference, Bremerhaven 3. 12
- ③古建築の外装塗装の物性に関する研究 (II) —丹色塗装の屋外曝露試験<1>—(川野邊, 岡部と共著) 「保存科学」 31 4. 3
- ④敦煌莫高窟の気象(2)-1989年から1991年まで— (三浦, 張, 王と共著)
「保存科学」 31 4. 3
- ④丹色塗装の人工劣化促進試験 (川野邊, 岡部と共同)
第13回古文化財科学研究会大会 3. 5
- ④丹色塗装の人工劣化促進試験—古建築の外装塗装の物性に関する研究(1)— (川野邊, 岡部と共同)
日本建築士上学会1991年大会学術講演会 3. 6
- ⑤文化財の劣化III (木, 石, 金属の劣化)
文化庁美術工芸課指定文化財展示取扱講習会
東日本ブロック (東博) 3. 7
西日本ブロック (京博) 3. 12
- ⑤シシュキノ岸壁画の劣化状況と保存方法, 計画について
ソ連・イルクーツク大学 3. 8
- ⑤History of the Legal System for the Protection of Cultural Pr-

operty in Japan, and Introduction of a New Measuring System
of Environmental Condition (伊藤と共同)

Reagional Symposium on the Protection of Cultural Property in
Tropical Environments of South Asia and Pacific,
Honolulu, Hawaii

3. 9

⑤ソ連・シシュキノ岸壁画の劣化および保存調査

国際交流基金調査報告会 3.10

⑤壁画保存 埋蔵文化財発掘技術者専門研修「保存科学課程」(奈文研) 3.11

⑥石造文化財保存調査報告書 一大韓民国(ソウル・慶州) 3. 5

⑥第2回アジア文化財保存セミナー 朝日新聞 3.12. 7

⑥第2回アジア文化財保存セミナー会議録(朽津, 佐野と共著) 4. 2

⑥アジア文化財保存に関するアンケート調査 —結果と考察— 4. 3

朽 津 信 明 (アジア文化財保存研究室)

②敦煌莫高窟の地質環境(段と共著) 「保存科学」31 4. 3

②窯壁の岩石学的研究—焼成回数推定への試み—「セラミック九州」25 4. 3

④石器で観察されたホルンフェルスの風化日本地質学会第98年学術大会 3. 4

④地質学と文化財 所内総合研究会 3. 6.13

④地質学からみた敦煌莫高窟の壁画保存
東京大学地質学教室セミナー 3.12. 9

④石器の風化 石器文化研究会 4. 3.28

⑤地質学と文化財保存 奈良大学 3.11.22

⑥サヌカイト今昔 『石の楽器—サヌカイトフォン』 3.10

⑥第2回アジア文化財保存セミナー邦文要旨集<翻訳> 3.11

⑥第2回アジア文化財保存セミナー会議録(西浦, 佐野と共著) 4. 2

IV. 事業

1. 出版

(1) 美術研究

平成3年度は第351号から第353号が下記の内容で刊行された。

美術研究 第351 (平成4年1月)

仏像表現における「型」とその伝播 (上)

—平安初期菩薩形彫刻に関する一考察—

長岡龍作

雪舟等楊の研究 (一) —雪舟のイメージ戦略—

島尾 新

快慶作 光台院蔵阿弥陀三尊像 (図版解説)

三宅久雄

近百年來中国絵画史研究 二・附一 (研究資料)

鶴田武良

美術研究 第352号 (平成4年2月)

絵の価値・絵の見方

—室町時代相国寺松泉軒の障子絵制作から—

鈴木廣之

仏像表現における「型」とその伝播 (下)

—平安初期菩薩形彫刻に関する一考察—

長岡龍作

国立歴史民俗博物館蔵「うたたね草紙」 (図版解説)

米倉迪夫

近百年來中国絵画史研究 二・附二 (研究資料)

鶴田武良

美術研究 第353号 (平成4年3月)

奈良時代の如意輪観音信仰とその造像

—石山寺像を中心に—

井上一稔

絵画と言語 (一) 「画」と漢字

佐藤道信

黒田清輝筆 其日のはて (図版解説)

山梨絵美子

海外所在日本美術品調査報告 一 (研究資料)

出 版

木造阿弥陀如来坐像 メトロポリタン美術館蔵

三宅久雄

木造地藏菩薩立像 同

副島弘道

内国勸業博覧会・万国博覧会関係文献所在目録(二) 美術部第二研究室編

(2) 日本美術年鑑

平成3年版(平成4年3月発行)

平成2年の内容をもつ。B5判330頁。

平成2年の美術界年史

美術展覧会(現代美術・西洋美術)

美術展覧会(東洋古美術)

美術文献目録(定期刊行物所載) (現代美術・西洋美術)

美術文献目録(定期刊行物所載) (東洋古美術)

物故者

(3) 芸能の科学

古典芸能についての研究論文, 調査報告, 資料翻刻等を掲載している。平成3年度は19・20号が下記の内容で刊行された。

芸能の科学19 芸能論考XII(平成3年12月発行)

芸能と扇の関係——その成立について——

中村 茂子

鎌倉・南北朝時代の「声明集」にみる記譜の諸相

——〔三十二相〕の音高表示を中心に——

高橋 美都

落語における「忠臣蔵」の受容

三村 昌義

悔過法要の形式——成立と展開——その二

佐藤 道子

資料紹介・明治期桜間家文書二点

羽田 昶

芸能の科学20 芸能論考XIII(平成4年3月)

日本の音楽理論における「中」について

蒲生 郷昭

民俗芸能に見る延年の諸相 その一

——東北地方を中心に——

中村 茂子

絵入狂言本挿絵試考——近松作元禄十二年——

鎌倉 恵子

舞踊「八段目(下の巻)」——その成立・伝承・影響——

丸茂美恵子

(4) 保存科学

所属研究員による文化財の保存と修復に関する科学的調査、研究受託研究報告等の論文報告および修復処置等を掲載している。平成3年度は第30、31号を発行した。掲載論文は下記のとおりである。

保存科学第30号

島根県荒神谷遺跡出土銅剣・銅鐸・銅矛の化学的調査—非破壊分析と鉛同位対比測定— 馬淵久夫・江本義理・門倉武夫・平尾良光・青木繁夫・三輪嘉六

古建築の外装塗装の物性に関する研究 (I)

—丹彩色の人口劣化促進試験—

西浦忠輝・川野邊 渉・岡部昌子

「アルカリ因子」についての再考

佐野千絵・三浦定俊

鎌倉時代の漆芸技法資料II—片輪車蒔絵螺鈿手箱—

中里壽克

国宝・重要文化財日光社寺建造物の保存に関する研究 (受託研究報告 第66号)

新井英夫・見城敏子・中里壽克・三浦定俊・森 八郎・江本義理・伊藤延男

保存科学第31号

水害をうけた図書・文書の真空凍結乾燥

増田勝彦

建築装飾金具の耐久性の研究

青木繁夫・門倉武夫・斎藤いほえ・鈴木雅洋・木下稔夫

古建築の外装塗装の物性に関する研究 (II)—丹色塗装の屋外暴露試験—

西浦忠輝・川野邊渉・岡部昌子

敦煌莫高窟の地質調査

朽津信明・段修業

敦煌莫高窟の気象(2)—1989~1991— 三浦定俊・西浦忠輝・張拥軍・王宝義

平成3年度修復処理概報

修復技術部

2. 黒田清輝巡回展

黒田清輝の遺作の多くを所蔵している本研究所は、黒田清輝の功績を記念し、併せて地方文化の振興に資するために、昭和52年度からの事業として黒田清輝巡

回展を年1回地方において開催してきた。平成3年度は次のとおり開催された。

会 場 宮崎県総合博物館

会 期 平成3年8月24日(土)～9月29日(日)

主 催 東京国立文化財研究所・宮崎県総合博物館・宮崎県・宮崎県教育
委員会・宮崎日日新聞社

開催日数 32日

入場者数 29,292人

陳列点数 油彩・パステル61点、木炭デッサン50点、写生帖17冊、書簡3点、
日記5冊、参考資料若干

図 録 A4判変型、128頁、原色図版24頁、単色図版73頁

3. 公開学術講座

美術部・情報資料部(第24回)

日 時 平成3年12月7日(土) 13:30-16:30

会 場 国立西洋美術館

講 演 (1) 中国寧波地方の仏教絵画 井手誠之輔
(2) 多彩な来迎の造形 三宅 久夫

芸能部(第22回)

日 時 平成3年12月20日(金) 18:00～20:30

会 場 台東区立旧東京音楽学校奏楽堂

テ ー マ 声明の技法——「大懺悔」「三十二相」を中心に——

講 演(1) 大懺悔と三十二相の特質と展開 高橋 美都

実 演(1) 法隆寺伝承の大懺悔

実 演(2) 古譜に基づく三十二相——雅楽との合奏の試み——

高田良信、大野玄妙、古谷正覚、多 忠輝、高桑賢治、上 研司

実 演(3) 法隆寺伝承の聖徳太子和讃

高田良信、大野玄妙、古谷正覚

講 演(2) 悔過会と三十二相 佐藤 道子

4. 夏期学術講座

芸能部

芸能部においては、芸能の多角的かつ総合的な研究に資することを目的として、例年夏期4日間にわたる学術講座を、都内各大学の大学院生を対象に実施している。会場を東京国立文化財研究所会議室とし、芸能部員がそれぞれの専門分野における研究成果を体系的に論ずるかたちをとる。

平成3年度は「絵画資料による近世演劇研究」というテーマを設け、鎌倉恵子が担当し、7月15日から18日までの4日間にわたり実施した。受講者は東京芸術大学、東京大学、お茶の水女子大学、学習院大学、明治大学、早稲田大学、武蔵野美術大学、慶応義塾大学、武蔵大学、共立女子大学、日本大学、成城大学、駒沢大学、立教大学の各大学院生および研究者で、受講者数は29名。日程及びテーマ細目は下記の通りである。

7月15日（月）

風俗画に描かれた舞台

絵入浄瑠璃本の挿絵—上方の古浄瑠璃—

古浄瑠璃時代の演出—からくりを中心に—

7月16日（火）

近松時代の絵入浄瑠璃本

金平浄瑠璃本の挿絵

歌舞伎の装置—風俗画と評判記を中心に—

7月17日（水）

歌舞伎の装置—風俗画と絵入狂言本を中心に—

役者評判記と絵入狂言本—その一 上方の作品—

役者評判記と絵入狂言本—その二 江戸の作品—

7月18日（木）

絵尽し

絵画資料から読み取れるもの

まとめ・質疑応答

5. 博物館・美術館保存担当学芸員研修

近年博物館、美術館の数が増加すると共にその施設が近代化し、燻蒸室、保存・修理室などの保存に関する施設設備が整備されて保存部門を担当する職員が配備されつつある。しかし、これらの職員が保存科学の知識や技術を修得しようとしても適当な学習の場や教材がないのが実情である。そのため博物館、美術館などの学芸員で保存を担当するものに対して、文化財の科学的保存に関する基礎的な知識および技術について研修を行い、その資質の向上をもって文化財の保護に資することを目的とし、研修会を開催した。受講者数は20名。日程および講師は下記の通りであった。

7月22日（月）

開講式・オリエンテーション・所内見学

保存科学概論 保存科学部長 馬 淵 久 夫

修復科学概論 修復技術部長 三 輪 嘉 六

7月23日（火）

文化財の材質と劣化—無機材質— 化学研究室長 平 尾 良 光

温度と湿度 物理研究室長 三 浦 定 俊

実習—温湿度測定機器の取扱い— 三 浦 定 俊

7月24日（水）

空気汚染 保存科学部主任研究官 門 倉 武 夫

実習—空気汚染— 門 倉 武 夫

文化財の生物劣化—被害と対策— 生物研究室長 新 井 英 夫

7月25日（木）

文化財の生物劣化—虫害と対策— 保存科学部調査員 山 野 勝 次

展示照明 保存科学部主任研究官 石 川 陸 郎

実習—光源の取扱い— 石 川 陸 郎

7月26日（金）

木製文化財の保存 愛知県立芸術大学助教授 山 崎 隆 之

染色品の保存 京都国立博物館学芸課 河 上 繁 樹

事業

石造文化財の保存	アジア文化財保存研究室長	西 浦 忠 輝
7月29日（月）		
金属文化財の保存	第3修復技術研究室長	青 木 繁 夫
油彩画の保存	創形美術学校修復研究所所長	歌 田 眞 介
生物	生物研究室長	新 井 英 夫
7月30日（火）		
文化財修復材料の取扱い基準		青 木 繁 夫
文化財の修復と合成樹脂	名誉研究員	樋 口 清 治
実習—文化財の修復と合成樹脂—		樋 口 清 治
7月31日（水）		
文化財の材質と劣化	第2修復技術研究室	川野邊 渉
X線撮影の方法と安全管理		三 浦 定 俊
実習—X線撮影—		石 川 陸 郎
8月1日（木）		
漆芸品の保存	第1修復技術研究室長	中 里 壽 克
紙製文化財の保存	第2修復技術研究室長	増 田 勝 彦
実習—紙製文化財の保存—		増 田 勝 彦
8月2日（金）		
日本画の保存	文化庁美術工芸課長	渡 邊 明 義
彩色材料	物理研究室	佐 野 千 絵
実習—X線撮影—		石 川 陸 郎
8月3日（土）		
レポート作成		
修了式		

6. 国際研究集会

昭和52年度から毎年主題を決め文化財の保存および修復に関する国際シンポジウムを開催しているが、今年は「能の伝承と再生」をテーマとし、芸能部の担当で開催した。海外から7名、国内から9名の研究発表者を迎え、能の伝承の諸相、能と現代芸術の交流、欧米における能の受容、復曲能の意義と活動について、参

加者123名で活発な討議が行われ、あわせて実演鑑賞も行った。日程および発表題目は以下の通りである。

名 称 The 15th International Symposium on the Conservation
and Restoration of Cultural Property
—Nō: Its Transmission and Regeneration—

日 時 平成3年10月29日(火)～31日(木)

場 所 国立能楽堂大講義室および舞台

(題名および発表者)

10月29日(火)

【基調講演】

1. The Place of Nō in the World of Theatre

(演劇の世界における能の位置) ハワイ大学 ジェイムズ・ブランドン

2. Transmission and Regeneration in Japanese Performing Arts

— With Emphasis on Nō —

(日本芸能の伝承と再生—能を中心として—)

東京国立文化財研究所名誉研究員 横道萬里雄

【セッション I】

3. Enacting Allusions: A Technique of Nō Theater

(演じられる本歌—ひとつの詩的手法—)

コーネル大学 カレン・ブラゼル

4. The Bodily Expression Created by Zeami

(世阿弥の身体)

東京大学 松岡 心平

5. On the Influence of Nō on the Performing Arts of the Pre-modern
Period — Focusing on Music —

(能楽が近世芸能に及ぼした影響について —音楽面を中心に—)

東京国立文化財研究所 蒲生 郷昭

10月30日(水)

【セッション II】

6. Song as the Nucleus of an Actor's Work on Stage

(演技の核心としての歌) ワルシャワ大学 ヤドヴィガ・ロドヴィッチ

事 業

7. Chamber Opera “Asaji-ga-yado” — An Attempt

(室内歌劇「浅茅ヶ宿」において試みたこと) 桐朋学園大学 増本伎共子

8. An Approach to Today's Nō — “Mizu no koe”

(現代能「水の声」の試み—能と現代演劇—) 劇作家, 演出家 岡本 章

9. Journey Performed — Theater of Nō Patterns and a Prophetic Nordic Poem

(演じられた「旅」—能様式の演劇と北欧の予言詩)

演出家 ウィリー・フリント

【セッションⅢ】

10. Nō in English: Nō's Contemporaneity and Universality

(英語能の可能性—能の現代性・普遍性を探って—)

武蔵野女子大学 リチャード・エマート

11. Aspects of Memory and Remembrance in Zeami's Nō

(世阿弥の能における回想形式) ミュンヘン大学 スタンカ・ショルツ

12. “Tristan” — A Nō Play by Ezra Pound

(エズラ・パウンドの能「トリスタン」をめぐる) 東京大学 成 恵卿

10月31日(木)

【講演と演能(能劇の座研究公演)】 舞台(1階)

13. The Primary Pattern of Feigned Madness

(佯狂の祖型——「多度津左衛門」の演劇性——) 演劇評論家 堂本 正樹

能舞「相聞」大槻文蔵 ほか

能 「多度津左衛門」梅若六郎・宝生 閑・山中雅志・山本東次郎ほか

【セッションⅣ】

14. “Directing” in Nō

(能の「演出」をめぐる)

東京国立文化財研究所 羽田 昶

15. A Revival of “Kaido-kudari” in Dokugin-Ikkan Style

—One Example of Musical Intercourse Between Nōkan and Hitoyogiri—

(独吟—管「海道下り」の復元—能管と一節切の交流—)

国立音楽大学 高桑いづみ

16. Significance of Newly Revived Pieces

(復曲の意味)

法政大学 西野 春雄

7. アジア文化財保存セミナー

世界的視野の中で、いくつかの文明の拠点を有するアジアには、数千年の歴史の中で産み出され伝承されてきた文化財が、さまざまな状況の中で保存されている。それらの文化財は、各時代に各地域で栄えた固有の文化の証であり、当事国の財産であると同時に、人類共通の遺産でもある。本セミナーは、東アジア、東南アジア、西南アジアの諸国に呼びかけ、文化財の保存に関連する基礎的情報を交換し、将来の多国間の共同研究・共同事業を推進するための礎を築くことを目的として企画されたものである。本年度はその第2回目として「博物館資料の保存」をテーマとして開催された。

会議は、2名の基調講演発表者と16カ国代表16名のカンントリーレポート報告者、さらに、4名の考古、美術工芸、保存の専門家で構成される日本代表デスクが加わって、円卓を囲んで行われた。また、文化財保存の専門家約30名がオブザーバーとして参加し、活発な討議が行われた。日程等内容は下記の通りである。

名 称 Seminar on the Conservation of Asian Cultural Heritage

- Conservation in Museums -

主 催 東京国立文化財研究所・文化庁

協 力 東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館・奈良国立文化財研究所・国際交流基金・ユネスコ・アジア文化センター

場 所 国立京都国際会館 他

日 程

11月15日(金) 開会式およびレセプション (上野精養軒)

11月16日(土)～17日(日) 国外参加者の視察、見学

11月18日(月)

1. 東京国立文化財研究所長 西川杏太郎 (基調講演)

「博物館における公開と保存」

2. タイ芸術総局国立博物館部保存課長 K.ジャンボスリ

「タイにおける博物館での保存」

事業

3. マレーシア国立博物館主席副館長 O.M.ヤティム
「マレーシアにおける博物館での保存：課題と展望」
4. インド国立文化財保存研究所長 M.V.ナイル
「インドの博物館における保存」
5. スリランカ国立博物館局長 T.グナワルディーナ
「スリランカ国立博物館における美術品の保存」
6. フィリピン国立歴史研究所保存部長 E.V.アルモサラ
「フィリピン保存センターにおける博物館所蔵品の保存」
7. インドネシア西ヌサテンガラ博物館長 V.J.ハーマン
「シュロの葉に書かれた文書の取扱と保存」

11月19日(火)

8. 国際文化財保存センター企画官 G.クリスト (基調講演)
「博物館での保存と担当者の研修－イクロムの役割－」
9. ネパール国立美術館長 K.P.シュレスタ
「国立美術館の収蔵品の保存」
10. 東京国立博物館学芸部企画課長 鷲塚泰光
「日本における美術品の保存」

<京都国立博物館・文化財保存修復所見学>

11月20日(水)

11. バングラデシュ国立博物館保存管理官 M.ジャハン
「バングラデシュにおける文化財の保存」
12. モンゴル国立博物館長 I.ランガスレン
「モンゴル民族歴史博物館設立、その発展」
13. 韓国国立文化財研究所研究員 韓成熙
「気候変化に伴う生物劣化からの文化財の保護」
14. 上海博物館文物保護研究部生物・化学研究室長 陳元生
「凝固した古代本（明代説唱本）の再剝離と修復処置」
15. ベトナム保存・博物館局首席保存専門官 トラン、K
「ベトナムにおける歴史記念物および博物館資料の保存」
16. ラオス博物館考古局副局長 B.ポウアシセンバセウス

「ラオス国立博物館における文化遺産の保存と修復」

17. ブータン国立博物館長 M.R. ツルク

「ブータンにおける壁画の保存」

18. モルディブ国立言語歴史研究所長付 A.S. ハッサン

「モルディブ国立博物館における所蔵品の状態」

11月21日(木)

総合討議

議長 東京国立文化財研究所保存科学部長 馬淵久夫

国際文化財保存センター企画官 G. クリスト

閉会式

8. 会 議

第3回アジア文化財保存修復協力センター〈仮称〉設置に関する調査研究会

アジアの文化財の保存、修復に関する国際的な研究交流、保存修復事業への協力、専門家の養成、情報の収集と活用等を実施し、文化財保護における国際的な責務を果たすとともに、文化財の保存修復に関する研究の向上に資することを目的とするアジア文化財保存修復協力センター〈仮称〉設置のための調査研究会として、外部の専門家、文化庁および東文研関係者が出席し、センターの設置目的、事業内容、組織、管理運営、施設等に関する事項について、検討、協議を行った。

日 時 平成4年3月16日(木) 14～17時

場 所 別館会議室

出席者 東文研13名、外部(文化庁、大学、国際機関他学識経験者)15名

総 括 本調査研究会における検討、協議内容は、次のように総括される。

文化財は人類共通の遺産であり、国家、民族を越えてその保存・修復に当たらなければならない、そのためには国際協力が不可欠である。文化財保護法のもと、文化財保護体制・技術・研究の整っている日本がこの面で果たすべき役割はきわめて大きく、実際、世界各国から多くの協力を求められている。これらの要請に対処するため、東京国立文化財研究所に国際共同研究、情報の収集と提供、人材養成を三本の柱

事業

とした国際的な協力センターを設立することがぜひ必要である。今後、調査研究を更に拡大、進展させ、アジア地域を含む世界の文化財の保存修復に協力する、文化財保存修復国際協力センター〈仮称〉設置に向けての、具体的な調査研究を行うべきである。

第20回文化財保存修復研究協議会

日時 平成3年9月27日(金)10—17時

場所 東京国立文化財研究所会議室

主催 新設の文化財施設における「アルカリ」発生の原因と対策

主旨

新しく博物館・美術館などの施設を建てる際には、あらかじめ文化財保存の観点から空調、照明など設計や施工の上でいくつかの留意する点がある。中でも特に打ち立てコンクリートから発生する「アルカリ」物質による汚染は、多くの関係者の関心を呼んでいる。今回の協議会は、この「アルカリ」汚染について原因物質の解明から除去対策まで含めて過去の研究を概説し、今後の対処の道を明らかにすることを目的として開催した。講演題目および発表者下記のとおりであった。

(1)「アルカリ」研究の流れ

東京国立文化財研究所保存科学部物理研究室長 三浦 定俊

(2)「アルカリ」因子の挙動 (財)文化財虫害研究所理事長 登石 健三

(3)いくつかの施設における「アルカリ」の研究例

清水建設(株)技術研究所環境技術研究部主任研究官 梶間 智明

(4)「アルカリ」の除去

日立プラント建設(株)空調事業本部開発部 小塩 良次

(5)博物館施設の設計 元東京大学工学部建築工学科 黒坂 五馬

(6)指定文化財公開施設設計上の指導

文化庁美術工芸課文化財調査官 鈴木 規夫

(7)新設展示館の諸問題

東京国立文化財研究所保存科学部主任研究官 石川 陸郎

(8)総合討議

9. 国際・国内交流

(1) 平成3年度職員の海外渡航

氏 名	渡 航 先	目 的	期 間	旅費の出所等
鶴田 武良	中華人民共和国	民国期絵画資料の収集と現代絵画の動向調査	自平成3年4月30日 至平成3年5月12日	私費
馬淵 久夫	〃	敦煌莫高窟壁画の保存協力	自平成3年5月7日 至平成3年5月20日	外国旅費
三浦 定俊	〃	〃	〃	〃
西浦 忠輝	〃	〃	〃	科学研究費
朽津 信明	〃	〃	〃	〃
増田 勝彦	アメリカ	フリア美術館所蔵日本美術品の保存修復調査	自平成3年5月14日 至平成3年5月20日	文化財保護振興財団
平尾 良光	トルコ共和国	第13回トルコ共和国発掘調査 国際シンポジウムにおける研究発表	自平成3年5月24日 至平成3年6月3日	私費
三輪 嘉六	中華民国	台北市 丸山貝塚の保存調査・指導	自平成3年6月3日 至平成3年6月12日	台北市
青木 繁夫	〃	〃	〃	〃
馬淵 久夫	イタリア	ICCROM 財政事業計画委員会出席	自平成3年6月22日 至平成3年6月29日	ICCROM
西浦 忠輝	ソ連	シシュキノ岸壁画保存のための調査	自平成3年7月31日 至平成3年8月7日	国際交流基金
西浦 忠輝	アメリカ	シンポジウム出席及び関連調査	自平成3年9月7日 至平成3年9月16日	アメリカ合衆国情報局
平尾 良光	トルコ及び欧州各国	欧州各国における博物館・美術館の保存環境の研究	自平成3年8月16日 至平成3年10月8日	文部省在外研究員費
島尾 新	アメリカ	在米日本絵画・彫刻の調査	自平成3年8月17日 至平成3年9月1日	古文書財科学研究会
増田 勝彦	オーストリア	ICCROM 主催 紙と紙関連文化財の保存に関する 国際研修コース講師	自平成3年9月11日 至平成3年10月6日	ICCROM
新井 英夫	韓国	韓国の文化財保存環境調査等	自平成3年9月24日 至平成3年9月30日	韓国政府

国際・国内交流

氏 名	渡 航 先	目 的	期 間	旅費の出所等
井手誠之輔	アメリカ及びカナダ	在米中国絵画の調査等	自平成3年9月30日 至平成3年12月3日	科学研究費及び私費
井上 一穂	イギリス	文化庁海外展「鎌倉彫刻展」開催による出品文化財保護、陳列等の現地指導等	自平成3年10月17日 至平成3年12月3日	国際交流基金及び大英博物館
米倉 迪夫	アメリカ イギリス フランス	物語絵の研究	自平成3年10月20日 至平成4年2月10日	文部省在外研究員費
西川杏太郎	中華人民共和国	敦煌莫高窟壁画の保存協力	自平成3年10月17日 至平成3年10月26日	外国旅費
三輪 嘉六	〃	〃	自平成3年10月17日 至平成3年10月30日	外国旅費
三浦 定俊	〃	〃	〃	科学研究費
朽津 信明	〃	〃	〃	〃
大堀 岳満	〃	敦煌莫高窟壁画の保存協力に伴う事務打合せ及び視察	〃	外国旅費
馬淵 久夫	イタリア	ICCROM 理事会及び財政事業検討委員会出席	自平成3年11月10日 至平成3年11月18日	日本政府
平尾 良光	アメリカ	スミソニアン共同研究における殷周青銅器の調査	自平成3年12月6日 至平成3年12月19日	科学研究費
鶴田 武良	中華人民共和国	日中友好会館美術館開催予定の「中国明清名画展」及び「故宫博物院展」のための調査	自平成4年1月15日 至平成4年1月23日	日中友好会館
馬淵 久夫	アメリカ	東アジア地域の古文化財の保存科学的研究	自平成4年1月10日 至平成4年1月18日	科学研究費
島尾 新	〃	在米日本絵画・彫刻の調査	自平成4年1月19日 至平成4年2月2日	古文化財科学研究会
長岡 龍作	〃	〃	〃	〃
馬淵 久夫	中華人民共和国	中国砂漠地帯の文化財保存のための調査研究	自平成4年2月22日 至平成4年3月2日	文化財保護振興財団
佐野 千絵	〃	〃	〃	科学研究費
朽津 信明	〃	〃	〃	〃
井手誠之輔	〃	〃	〃	〃
佐藤 道子	〃	第3回中国芸術祭シンポジウム発表等	自平成4年2月28日 至平成4年3月6日	日中文化交流財団

(2) 招へい研究員

昭和53年度より招へい研究員制度が設けられ、平成3年度は国外26名の研究員を招へいし、下記のように共同研究が行われた。

国外招へい研究員

氏 名	国 籍	役 職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
ワティ・M・スワルディ	インドネシア	インドネシア政府教育文化省文化総局	3. 4. 1 ～ 3. 9. 26	文化財の保存・修復システムに関する研究	修復技術部室長 青木 繁夫
金 正 耀	中 国	中国社会科学院世界宗教研究所	3. 7. 1 ～ 4. 8. 31	中国製青銅器の鉛同位体比に関する共同研究	保存科学部室長 平尾 良光
◎バメラ ヴァンディヴァー	アメリカ	スミソニアン研究機構研究員	3. 7. 18 ～ 3. 8. 7	東アジア地域の古文化財の保存科学的研究	保存科学部長 馬淵 久夫
時田 アリソン	オーストラリア	モナシュ大学	3. 8. 5 ～ 4. 2. 5	日本の伝統的な各種語りもの音楽に関する共同研究	芸能部室長 蒲生 郷昭
※スタンカ・ショルツ	ドイ ツ	ミュンヘン大学教授	3. 9. 25 ～ 3. 10. 27	狂言と説話文学・お伽草子との関連及び世阿弥能楽論についての研究	芸能部室長 羽田 昶
金 壽 起	大韓民国	湖巖美術館保存科学研究室	3. 11. 4 ～ 3. 11. 12	金属遺物の脱塩方法(SOXHLET, PLASMA 法) 水浸漆の保存	修復技術部室長 青木 繁夫
張 徳 勳	中 国	中国国家文物局長	3. 11. 4 ～ 3. 11. 13	敦煌莫高窟壁画保存共同研究を含む日中間の国際協力についての協議	所長 西川杏太郎
※劉 小 和	〃	国家文物局計財処長	〃	〃	アジア文化財保存研究室長 西浦 忠輝
※胡 駿	〃	中国文物研究所副処長	〃	〃	〃

国際・国内交流

氏 名	国 籍	役 職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
※達 家 郷	〃	国家文物局外事処幹部	〃	〃	〃
ユクセル デア	トルコ	イスタンブール大学講師	3.11.28 ～ 4. 4.27	金属遺物の安定化処理を中心とする考古資料の保存修復研究	修復技術部長 青木 繁夫
李 奎 植	大韓民国	韓国文化財研究所保存科学研究室研究員	3.12. 1 ～ 4. 1.30	文化財加害生物の生理・生態に関する研究他	保存科学部長 新井 英夫
※段 修 業	中 国	中国敦煌研究院保護研究所助理研究員	3.12.20 ～ 4. 2.17	分析機器の走査方法、顔料分析および環境機器計測に関する研究	アジア文化財保存研究室長 西浦 忠輝
※王 宝 義	中 国	中国敦煌研究院助理館員	3.12.20 ～ 4. 3. 9	〃	〃
※李 軍	〃	〃	〃	〃	〃
ルドミラ マルコバ	ブルガリア	国立文化遺産研究所修復建築家	4. 1. ～ 4. 2.	現代都市における文化遺産の保存に関する研究	修復技術部長 三輪 嘉六
アンドレア ジョバニーニ	ス イ ス	書籍修復工房主宰	4. 2.15 ～ 4. 2.29	羊皮紙文書の保存に関する研究	修復技術部長 増田 勝彦
コスタス ハサボボロス	キプロス	キプロス文化財保存技術研究員	4. 2.24 ～ 4. 5.30	文化財保存修復のための研究	修復技術部長 中里 壽克
アンドラス モルゴス	ハンガリー	国立博物館センター保存部長	4. 3. 2 ～ 4. 3.13	文化財の科学的保存処置および日本の伝統的修復技法に関する調査	アジア文化財保存研究室長 西浦 忠輝
※ジリスラメク	チェコスロヴァキア	チェコスロヴァキア国立文化財研究所研究部長	4. 3.23 ～ 4. 3.29	石造文化財の保存を目的とした石材の劣化現象に関する実験的研究	〃
ピラ ロボ チャラット	タ イ	芸術総局考古部保存計画課課長	4. 3.17 ～ 4. 3.30	文化財保存計画・技術に関する調査・研修	〃
エメリタ V. アルモサラ	フィリピン	国立歴史研究所記念物・紋章室長	4. 3.10 ～ 4. 3.23	文化財特に美術工芸品の保存の実際と研究動向に関する調査・研究	〃
オスマン M. ヤティム	マレーシア	国立博物館局研究部長	4. 3.10 ～ 4. 3.23	文化財特に美術工芸品の保存の実際と研究動向に関する調査・研究	〃

氏 名	国 籍	役 職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
李 午 憲	韓 国	三星美術文化財団 湖巖美術館 保存科学研究室長	4. 3. 2 ～ 4. 3.13	文化財修復に関する調査・研修	修復技術部長 青木 繁夫
◎トム チェイス	アメリカ	フリーア美術館保存部主任	4. 3. 3 ～ 4. 3.22	東アジア地域の古文化財の保存科学的研究	保存科学部長 馬淵 久夫
エミール ジョエル	アメリカ	スミソニアン研究機構研究員	4. 3.16 ～ 4. 3.22	東アジア青銅器の鉛同位体比の研究	保存科学部長 馬淵 久夫

注1) ※は研究所予算で招へいしたことを表す。

注2) 国際研究集会、アジア文化財保存セミナーの招へい研究員については各々の項に記載した。

注3) ◎は、科学研究費補助金で招へいしたことを表す。

(3) 平成3年度海外研究者の来訪

氏 名	国 籍	所 属 等
アハメド アルーハキム	ス ー ダ ン	スーダン王国文化情報省次官
クルラサップ ゲスマニキット	タ イ	タイ教育省芸術局局長
李 昶 根	韓 国	木浦海洋遺物保存処理所長 他1名
閻 亜 寧	台 湾	行政院文化建設委員会第一処
ルン クワダン	タ イ	タイ教育省教育事務次官補
常 青	中華人民共和国	中国社会科学院考古研究所助理研究員
劉 振 東	〃	中国社会科学院考古研究所研究実習員
姜 宝 蓮	〃	中国陕西省文物研修生
馬 承 源	〃	中国上海博物館館長
張 柏	中華人民共和国	中国麦積山石窟展甘肅文物代表団国家文物局副局長 他6名
ベン イエット	カンボジア	プノンペン芸術大学長・カンボジア情報文化省副大臣 他2名

V. 研究施設・設備

1. 蔵 書

美術関係図書

日本・東洋古美術、日本近代・現代美術、西洋美術の全般にわたる研究書を中心に、関連図書、各種叢書、辞典類など漢書(40,548)、洋書(4,066)、計44,614冊のほか、各都道府県市町村教育委員会編集の文化財関係報告書、美術関係雑誌、紀要類、売立目録、展覧会目録などを所蔵し、所内及び所外の研究者の利用に供している。

芸能関係図書

雅楽・寺事・能・文楽・邦楽・民俗芸能・寄席芸、その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書9,350冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報(第1次)・テアトロ(第1次)・新劇・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説などの雑誌、それに声明本・謡本・囃子手付本・丸本などの台本・譜本も収集している。

保存科学・修復技術関係図書

古来の伝統的生産及び工芸技術書、技術史、または数少ないそれらの科学的究明を試みたもの、修理工事報告書及び物理学・生物学部門の保存科学に関連する和洋書を合わせ3,068冊を所蔵している。

本年度における収書数と総計は次表のとおりである。

区 分	美 術 関 係		芸 能 関 係		保 存 科 学 ・ 修 復 技 術 関 係		計
	和 漢 書	洋 書	和 漢 書	洋 書	和 漢 書	洋 書	
3 年 度	480冊	7冊	257冊	5冊	29冊	4冊	782冊
総 数	40,548冊	4,066冊	9,229冊	121冊	2,049冊	1,019冊	57,032冊

2. 資 料

美術関係資料

実物よりの直接撮影を主にした写真資料の作成整理と、購入写真、複写写真による補足整備に加えて、印刷物中の図版をおさめるという方式で、当研究所設立当初より一貫して力を注いできた写真資料を有する。それらは日本東洋古美術、日本近代・現代美術、西洋美術の全域にわたり、それぞれ絵画、書蹟、彫刻、工芸、建築等の諸部門に及ぶ。特別大型のものから小型のものまで総数凡そ26万点、原板保有量はほぼ3分の1にあたり、別にマイクロ・フィルム255巻がある。写真資料のほか、拓本、作家伝記資料、落款印章資料、近代・現代作家・団体・作品資料、資料スクラップ等と、図書カード、図版カード、各種索引類など多数。

芸能関係資料

レコード、録音テープ、シネフィルム、ビデオテープ、写真等による芸能資料を数多く備えている。レコードには、毎年各社から発売される伝統芸能関係レコードのほか、昭和35年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションレコード5,450枚が含まれている。安原コレクションは、明治・大正・昭和三代にわたって発売された各種邦楽レコードを網羅したもので、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。録音テープ及び写真は、雅楽・能・歌舞伎・邦楽・邦舞・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので、演奏法の解析を中心とした写真、テープ、あるいは各種文書の記録写真等も含んでいる。資料別の所蔵数は、つぎのとおりである。

区 分	録 音 テ ー プ		シネフィルム		ビデオテープ	
	アナログ方式	PCM 方式	8mm	16mm	β, VHS 方式	8mm
平成3年度	2本	53本	0本	0本	32本	11本
合 計	2,852本	331本	198本	4本	269本	22本

主要機器・設備

区 分	音 盤		
	SP・LP	CD	VHD・LD
平成3年度	0枚	28枚	14枚
合 計	7,118枚	28枚	14枚

3. 主要機器・設備

美術部・情報資料部		
名 称	使 用 目 的	備 考
X線透過撮影装置	軟X線照射による絵画・彫刻の顔料・構造等の非破壊分析。	
紫外線照射装置	紫外線照射による蛍光物質の分析。補絹・補彩領域の明別。	
顕微鏡装置	双眼実体顕微鏡による美術作品細部の非接触観察。	KARL ZEISS
赤外線テレビ関係設備	赤外線照射による墨線の抽出。下図・銘文等の解説。	浜松テレビ
ビデオイメージスコープ	内視鏡による彫刻作品等の内部観察。	オリンパス
ローカルエリアネットワーク	LANによる情報処理の円滑化。情報の統合・共有化。	NET ONE (アングマンバス)
画像処理装置	デジタル画像処理技術による多角的画像分析。画像データベースの試作。	NEXUS6800シリーズ
光ディスクファイリングシステム	大量の調書・カード類の一括管理。簡易画像データベースの試作。	RIFILE

芸能部		
名 称	使 用 目 的	備 考
舞台（視聴室）	実技者を招いて分析研究のための実演を行う。またその実演を舞台に続く調整室で撮影し、録音する。	残響時間0.30/秒
録音室	実技者を招いて分析研究のための、良質な録音を行う。	残響時間0.15/秒 アナログ・デジタルの録音可能。
メログラフ	音の高さと強さの細かい変化を正確に計り、分かりやすいグラフで記録して、音楽の科学的分析を行う。	型名 B/T
レーザー・ターンテーブル	レーザー光でアナログ・レコードを非接触で再生する。貴重なレコードを半永久的に使用できる。	エルプ LT-IX

保存科学部		
名 称	使 用 目 的	備 考
蛍光 X 線分析装置	金属、顔料、岩石、土器などの化学組成を非破壊的に測定する。理学電機製は可搬型である。	フィリップス PW1404 理学電機 TBF01
X 線回折装置	粉末にした金属、岩石、土器、顔料などの結晶を同定する。理学電機製は可搬型である。	日本電子 JDX-10PA 理学電機 TBD10
原子吸光分光分析装置	岩石、土器、金属などに含まれる元素を定量する。	ジャーレルアッシュ AA8500
誘導結合プラズマ分光装置（ICP）	岩石、土器、金属などに含まれる元素を定量する。	セイコー SPS1100
質量分析装置	鉛、ストロンチウム同位体比測定から、青銅、岩石の原料産地を推定する。	VG Sector
イオンクロマト分析装置	岩石、鏽中の陰イオン濃度や空気中の SO_x 、 NO_x 濃度の測定を行ない、鏽の進行状況や空気汚染の程度などを推定する。	横河電気 IC500P

主要機器・設備

名 称	使 用 目 的	備 考
電子スピン共鳴装置	遷移金属イオンや劣化に伴って生じるフリーラジカルを測り、劣化の進み方や程度を知る。	日本電子 JES-RE1X
化学発光分析装置	化学反応にともなって放出される微弱光を測り、反応の進み方や劣化の度合いを知る。	東北電子 CL-100
自記分光放射計	分光スペクトルを測定して、展示に用いる光源や紫外線吸収ガラス、フィルムなどの性能をしらべる。	日本分光 SR500B
走査型電子顕微鏡	高倍率で試料表面の状態を観察するとともに構成元素の分布を調べ、構成材料や構造、技法について知る。	日本電子 JXA-840
工業用 X 線検査装置	透視撮影によって彫刻・工芸・考古遺物などの構造や光電子撮影によって絵画の顔料をしらべる。	フィリップス MG321他
減圧燻蒸装置	文化財加害生物を防除するための燻蒸法の研究、行う。	SK 2 型
生物顕微鏡	微生物プレパラートを透過光および落射蛍光にて観察し、加害生物種の同定などをおこなう。	ニコンマイクロ フォト FX
微生物検体作製装置	微生物胞子の発芽に及ぼす風の影響をしらべる。	小林精機 CP 型

修復技術部

名 称	使 用 目 的	備 考
減圧含浸装置	脆弱化した文化財に減圧下で樹脂を含浸する装置。	共和真空
プラズマ装置	酸化した出土金属遺物を水素プラズマを利用して還元処理する。	神港精機 MP1017
エアブラッシュ	出土金属遺物の錆や泥をクリーニングする。	S.S WHITE K
真空凍結乾燥機	水浸木材等の有機遺物を乾燥処理する。	共和真空 RLW-20MB

名 称	使 用 目 的	備 考
サンシャインウェザーメーター	修復材料等の耐候性試験	スガ WEL-SUN-DC
強度試験機	紙・布の各種処理後の強度を測定して、処理法による影響を判断する。	島津 AC-25TB
紫外線フェードメータ	塗料・有機材料の耐候性試験	スガ

4. 黒田記念室

黒田記念室は、本研究所の創立者帝国美術院長子爵故黒田清輝の功績を記念するために設けられた陳列室であり、黒田清輝の油絵・素描・写生帖等を収蔵している。

創立当時、主として黒田家から寄贈されたものは、油絵125点、素描170点、写生帖等であるが、その後黒田照子夫人、樺山愛輔、田中良氏等からの寄贈が加わった。収蔵品の主なるものは、「智・感・情」・「花野」・「湖畔」・「赤髪の少女」・「もるる日影」・「温室花壇」などである。

5. 観 覧 室

本研究所情報資料部の図書写真及び各種研究資料は、主として研究者・学者・美術関係専攻の学生等の利用に供している。

VI. 関係法規

◎文部省組織令(抄) (昭和59 政令第227号 最終改正 昭63政101号, 197号)

第2章 文化庁

第3章 施設等機関

(施設等機関)

第108条 文化庁長官の所轄の下に、文化庁に国立国語研究所を置く。

2. 前項に定めるもののほか、文化庁に次の施設等機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国際美術館

国立文化財研究所

(国立文化財研究所)

第114条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2. 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

3. 国立文化財研究所及びその支所の名称、位置及び内部組織は、文部省令で定める。

(研究施設の指定)

第115条 国立国語研究所及び国立文化財研究所は、法第5条第37号に規定する政令で定める研究施設とする。

◎文部省設置法施行規則(抄) (昭和28年 文部省令第2号 最終改正 平2文令13号)

第5章 文化庁の施設等機関

第4節 国立文化財研究所

第1款 名称及び位置

(名称及び位置)

第116条の9 国立文化財研究所の名称及び位置は、次の表に掲げるとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

第1款の2 東京国立文化財研究所

(所 長)

第117条 東京国立文化財研究所に、所長を置く。

2. 所長は、所務を掌理する。

(内部組織)

第118条 東京国立文化財研究所に、庶務課、次の五部及びアジア文化財保存研究室を置く。

- (1) 美 術 部
- (2) 芸 能 部
- (3) 保存科学部
- (4) 修復技術部
- (5) 情報資料部

(庶務課の事務)

第119条 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

- (1) 職員の人事に関する事務を処理すること。
- (2) 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。
- (3) 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。
- (4) 経費及び収入の予算、決算その他会計に関する事務を処理すること。
- (5) 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。
- (6) 庁内の取締りに関すること。
- (7) 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

(美術部の二室及び事務)

第120条 美術部に、第一研究室及び第二研究室を置く。

関係法規

2. 第一研究室においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
3. 第二研究室においては、わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行うとともに黒田記念室に関する事務をつかさどる。

(芸能部の三室及び事務)

第121条 芸能部に、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び民俗芸能研究室を置く。

2. 演劇研究室においては、演劇及びその保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
3. 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
4. 民俗芸能研究室においては、民俗芸能及びその保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(保存科学部の三室及び事務)

第122条 保存科学部に、化学研究室、物理研究室及び生物研究室を置く。

2. 化学研究室においては、文化財及びその保存に関する化学的調査研究（分析的調査研究を含む。）を行い、並びにその結果の公表を行う。
3. 物理研究室においては文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
4. 生物研究室においては文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(修復技術部の三室及び事務)

第122条の2 修復技術部に、第一修復技術研究室、第二修復技術研究室及び第三修復技術研究室を置く。

2. 第一修復技術研究室においては、木、漆その他次項及び第4項の材料以外のものを材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
3. 第二修復技術研究室においては、紙、布又は革を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
4. 第三修復技術研究室においては、石、土又は金属を材料とする文化財の修復

に関する科学的、技術的調程研究を行い、及びその結果の公表を行う。

(情報資料部の二室及び事務)

第122条の3 情報資料部に、文献資料研究室及び写真資料研究室を置く。

2. 文献資料研究室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る文献資料その他の資料(写真資料を除く)の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。

3. 写真資料研究室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る写真資料の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。

(アジア文化財保存研究室の事務)

第122条の4 アジア文化財保存研究室においては、アジアの文化財及びその保存に関する資料収集並びに調査研究及びその結果の公表を行う。

東京国立文化財研究所要覧（平成3年度）

平成4年12月1日 発行

発行所 東京国立文化財研究所

〒110 東京都台東区上野公園13-27

電話 (3823) 2241（代表）

正 誤 表

頁	〔誤〕	〔正〕
11頁表中 24行目	昭62.4.1~平4.3.31	昭62.4.1~平3.3.31
72頁 21行目	敦煌莫高窟の地質調査	敦煌莫高窟の地質調査
82頁 下から2行目	東京国立文化財研究所保存科学部主任研究館	東京国立文化財研究所保存科学部主任研究室
86頁表中 1行目 氏名	※ <u>遠家輝</u>	※ <u>遠家輝</u>
〃 国籍	〃	中国
〃 招へい期間	〃	3.11.4~3.11.13
〃 共同研究課題	〃	敦煌莫高窟壁画保存共同研究を含む日中 間の国際協力についての協議
〃 研究代表者	〃	アジア文化財保存研究室長 西浦忠輝